WE ARE!

第5号

Contents

なかはられいこ新作☆しおれな GIRL・しゃべらな BOY …… 02
倉富洋子新作☆人見知りの吸血鬼だったかもしれない夏に …… 04

ゲストによるなかはら作品鑑賞 …… 07

ゲストによる倉富作品鑑賞 …… 15

俳人＆歌人ゲストが詠む川柳 …… 22
　ゲストプロフィール …… 23

＜俳句＞遠藤　治　　仮面 …… 24
　　ていだきねこ　やや沈下 …… 25
＜短歌＞加藤治郎　　セル …… 26
　　本田瑞穂　　真昼の月 …… 27
＜川柳＞丸山　進　　気まぐれな関係 …… 28
　　峯　裕見子　　五黄 …… 29

なかはら＆倉富が読むゲスト作品 …… 31

Eの会 vol.3 レポート（兼題・席題） …… 44

マラソンリーディングレポート　藤原龍一郎 …… 56

座談会／朗読という文化・朗読というメディア …… 60

川柳の現在を考えるために　　荻原裕幸 …… 72

ハラ・クラのいろいろ Review …… 06・14・30

編集後記 …… 78

欠点をひとつあげれば夏ですね
スタンプを集めてもらう真空地帯
エプロンと海岸線をつけたまま
UV対策終わりましたか有事です
ファスナーを下げて引きずり出す国家
バタンバタンしている扉、答えなさい
窓口に並ぶ酸素をもらうため
さかさまのことばが映る水たまり
五つ星貼ってあるから泣かなくちゃ
泣き声の滞空時間計測中

しおれなGIRL・しゃべらなBOY

なかはられいこ

ゆびさきに昼が絡まるべたべたする
球根の過去を暴いているテレビ
バス停でまばたきしてはいけません
いま空が生まれる画面の左上
寄せて上げて寄せてきれいな月つくる
ゆでたまご転がるところどころ虹
懸賞で当たった星の滅びかた
かゆいとこございませんかと追ってくる
お別れね　壜の中身を当てたから
ではアマリリスから準備体操、はじめっ

人見知りの吸血鬼だったかもしれない夏に

倉富洋子

コンセント抜くと濁音たちこめる
忘れないようにリュックに詰める耳
昔話しようか雨季が終わるまで
さあ次はあなた、と渡されるトマト
謝っておく水玉になる前に
ゆるぎなく愛されミントガムがきらい
君の手の中の朝日が正解です
無声映画のなかではきよらかな海月
犯人で満室になる夏の午後
黄昏はマナーモードにして下さい

罫線をはみだしていく「ごはんですよ」
　慈悲深いメロンに見逃してもらう
雨が生まれる場所です全席禁煙です
はちみつの午後かんぺきなわたしたち
　万緑をめくるとヴァンパイアの卵
「んーと」のすきまにとりあえずパセリ
ゴドーはもう来たんだ　だって、ほら、真夏
俯瞰図のああこのへんがチェリー・パイ
　柑橘系あたりの路地で待っててね
ぐるぐるのつづきはまた次の夏に

ハラ・クラのいろいろReview

▼俳句同人誌『狼』12号

超結社の俳句同人誌『狼』12号。表紙にも誌面にも、極めて上質の紙が使われていて、手に取るとため息が出る。誌面を開くと活字の色に目を奪われる。12号は一見茶色に見えるけれど、光に当てるとキラキラ光る。もしかしたら、これ金色？　とちょっとビビる。「12号は」と書いたのは、活字の色が毎号代わるからで、9号はなんと銀色だったからである。ふたたび、ため息。いやはや、なんという同人誌だろう。

いや、だけど、見栄えばっかりよくって、中身にがっかりする、ということは人生にはままあることだ。料理でも道具でも建物でも男でも女でも。もんだいは中身だ。

ということで、肝心の中身なんだけど、この『狼』くん、ビジュアルのクオリティの高さに、中身のほうもぜんぜん負けてない。

12号の「実験室」では「最短詩型への跳躍」と題して、12音俳句の実作という恐ろしい実験が行われている。このコーナーでは過去にも、オノマトペ句やひらがな句の実作がなされてきた。くるしむに決まってることに敢えて挑戦し続けるという、その表現者としてのこころざしの高さに、深い共感を覚える。

誌名の『狼』は、たぶん結社を超えた一匹狼たちの集団であることを表わしているのだろう。「実験室」の作品から、狼たちの挽歌をご紹介しておく。

噛みしめる奥歯がないの　岩田青崖
溶けるから文字なのです　小池弘子
だまって夕陽をさげている　大沢輝一
ちぎられた封筒でいる　佐孝石画
姉さんはガラスの風鈴　幅田信一
たいくつそうな水鉄砲　関戸美智子
切なさは春の三日月　舘百合子

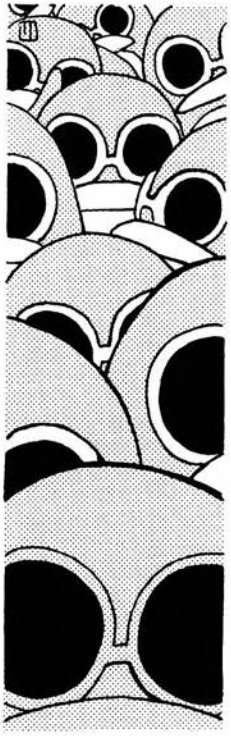
叩き割って半月　中内亮玄
アルコールランプがこわい　岡村知昭

発行人：大沢輝一
季刊：定価５００円
申込先：狼発行所
郵便振替：狼俳句会
００７８０・０・４６６３５

俳人・歌人・川柳作家ゲストによる
なかはられいこ作品鑑賞

しおれなGIRL・
しゃべらなBOY

しおれてなんかいられないわ。
だって夏よっ！
夏、夏、夏、なつーっ！



しゃべらねーよ、かったるいし。
だいいち、夏だし。
しょーもねー。

ＧＩＲＬとＢＯＹが
笑う、泣く、叫ぶ、歌う、踊る
そして、眠る。

ＧＩＲＬとＢＯＹが
座る、立つ、走る、食べる、飲む
そして、黙る。

ソーダ水の中をゆく船なんか見えないけど、
かぶとむしもくわがたも
ペットショップに行けばちゃんといる。
花火が終わって急にさみしくなったけど、
夜空にはミルキィウェイがあるんだよ、いまも。
目を凝らせばきっと見える。

夏です。

はじめっ

遠藤　治

なかはられいこが句を詠むとき、詠むべき対象なんてものは存在しないのかも知れない。対象に従属するのではなく、句とともに突然生命を与えられ読者に投げ出される言葉たち。

一般論として、俳句では五七五というあまりにも短い詩形を克服するために、季語や切れ字を約束ごととして駆使する。また流派によって「花鳥諷詠」とか「無季容認」などの共通理念を持ち、あらかじめ定まった価値基準の中で善し悪しを測ろうとしている面もある。「なんでもあり」にするには、五七五は短すぎるのだ。では同じ五七五の構造を持つ川柳において、なかはられいこの場合はどうなのか。

いきなり私事で恐縮だが、小学生のときの国語のテストで「〇も涙もない」の〇を埋める問題があり、私はどうしても思い出せず「目」と書いた。「目も涙もない」。試験中だったので笑いをこらえるがつらかった。なかはられいこの句に向かうとき、私はこの懐かしくもふざけた記憶を思い出さざるを得ない。

〈欠点をひとつあげれば①ですね〉〈スタンプを集めてもらう②〉〈エプロンと③をつけたまま〉〈UV対策終わりましたか④です〉〈ファスナーを下げて引きずり出す⑤〉といった穴埋め問題に対し、なかはられいこは独特の機知で言葉を選び、驚きに満ちた言葉の衝突が読者の世界観を覆す。穴埋め箇所一点で衝突を起こすために、穴埋め箇所以外は紋切り型ないしはそれに類する平明な表現となるよう仕組まれている。ともすれば単なる瞬間芸に終始しかねない危険と背中合わせのこれらの句群の中では、〈**エプロンと海岸線をつけたまま**〉が気に入った。昼寝覚であろうか、甘美な夢がぱっくりと口を開いたまま中断したなんとも不可思議な雰囲気が秀逸である。〈**寄せて上げて寄せてきれいな月つくる**〉も同様の技法による秀句である。ここでは読者が当然〈胸〉を思い浮かべるべき穴に〈月〉が埋められている。脇の下や腹の脂肪を集める下世話な動作と満ち欠けする〈月〉は、絶妙な了解感とともに配合していると言えよう。

〈**五つ星貼ってあるから泣かなくちゃ**〉〈**お別れね　壜の中身を当てたから**〉に見られる理不尽な因果、〈**バス停でまばたきしてはいけません**〉の理不尽な禁止、そして〈**バタンバタンしている扉、答えなさい**〉〈**ではアマリリスから準備体操、はじめっ**〉などの句に見られる命令形もなかはられいこの特徴を形作っている。命令形が混在していることによるのだろうか、なかはられいこの句群は全体的にスピード感が漲っている。それはもしかすると、今生まれたばかりの言葉に活性化を命じる秘密の号令なのかも知れない。

スースーします　ていだきねこ

エプロンと海岸線をつけたまま

フィールドマップの水際に海岸線がついたのは、「ドラクエⅡ」からであり、「てつのまえかけ」と「せいぎのそろばん」を装備した楽天商人トルネコが初登場したのは「ドラクエⅣ」である。海岸線とならべられているということは、それがなくなると、きわどい断面をさらけだしてしまうようなアイテムということだ。だったら、まえかけよりも、「あぶないみずぎ」や「まほうのビキニ」の方が近い。そこへ何故エプロンを持ってくるかというと、裸＋水着よりも、裸＋エプロンのきわどさのほうがはるかに優るからに決まっている（くわえて、お尻のかたちに自信があるからというのもあるにきまっている。WOW！　PEACH！）。

そんなにきわどさを演出してどうしようというんだ！　イライラしてくるぜ、コウシテヤルゥ!!

というわけで、なかはられいこはエプロンの紐や海岸線のはしっこを鷲掴みにして、ベリベリベリッとひっぺがしたりするんである。アーレー、くるくるくるくるっ。

ああ、もう、スッキリさせてくれやがって！

窓口に並ぶ酸素をもらうため

並ぶのは、あまり好きではないけれど、おいしいラーメンやジェットコースターなどのイベントに込みになっているなら、あえて楽しむこともできる。他地域から東京へ来た人の中には、「なんでモノ食べるのにわざわざ並ばなくてはいけないのか」という大意らしき言語を聞こえよがしに発する御尽もあるやらないやらだけど、まあ、そういう人は並ばなければよいのだし、黙っていればよいのだ、黙っていれば。

おおかたの場合には、そういう人は黙って並びに来ないでくれればそれでよいのだけれど、酸素の配給をうけねばならぬ事態ともなれば、そういう人だって来るんだろうなあ。空気がもうダメになっているから、さわやかな空の下なんかじゃないし、なんかシチめんどくさそうな「窓口」ってやつが目的地ってのは、じつに気がおもいはなしである。

あのね、みんな我慢してんだから、そこの人、文句だか嫌味だか垂れ流しにすんのやめてくんない？

微妙にヤな感じ、イライラする感じっていうのはナマで出してしまうと、行列や満員電車の中で毒づいている奴と同じになってしまうし、むずかしい。

でも、川柳ってなんだか、そういうのちょっと得意なのかもしれない。スッキリするための装置が組み込まれているようで、不思議だ、気になる、もっと読みたい。

なかはられいこを読む

加藤治郎

なかはられいこは、この最小の詩型におけるポエジーの可能性に誠実に取り組んでいる作家であると思う。形式に頼っていないとも思う。もとより季語という〈場〉がない。五七五のリズムにも依存していない。なかはらは、イメージの転換による捻れや不条理に、ポエジーを求めている。

初句に捻れが発生するケースは、原理的に稀である。それが捻れているかどうか、読み下すその時点で判断しようがないからだ。結句（三句め）に、ある種の転換や飛躍が生まれるケースが多いのは必然だろう。その意味で、五七五は転換を提供できる最小の詩型なのだといえる。

欠点をひとつあげれば夏ですね

この句でも転換は最後にやってくる。この〈夏ですね〉、巧い。ちょっとずれた感じ。〈欠点をひとつあげれば〉と〈夏ですね〉、どちらも日常的な意識だが、それが淡く交差したとき、不思議な空間が生まれる。これは散文では表現できないニュアンスである。翻訳不能であり、ポエジーが滲出している。〈欠点〉イコール〈夏〉という解釈は難しいだろう。敢えていうと、例えばこんな場面。なにか催し物を企画している。面白い企画だが、欠点をひとつあげれば、時期が夏であるということ。暑くて…。こういう想像も楽しいが、やはり、二つの意識の淡い交差と読んでおきたい。

スタンプを集めてもらう真空地帯
UV対策終わりましたか有事です
ファスナーを下げて引きずり出す国家
バタンバタンしている扉、答えなさい

これらも結句に転換がくる。文脈上異質なイメージの提示である。〈真空地帯〉は、判断が難しい。〈スタンプを集めてもらう〉で切れているのかどうか。切れていないのだろう。スタンプを集めて真空地帯をもらう、という不条理な世界を提示しているのだ。〈有事です〉は、唐突な印象を受けた。UVの危険性から、有事への連想は難しくないのだが、二句めで切れている分、飛躍が鮮明になっている。

今までひとまず転換といってみた。これは、俳句の配合と似ているようで、どうも違うのではないか。配合は、二物衝撃ともいわれるように、二つのイメージの組み合わせによって、新しい世界を出現させる。一方、なかはら作品の場合、受け取るのは、交差、捻れといった感触である。衝撃ではない。この問題、既に議論が尽くされているのだろうか。

このあたり、一句の構想の根幹に関わる問題だろう。なかはらは、五七五を一つのまとまった空間として把握しているように思われる。どこまでが作家の個性で、どこからが川柳というジャンルの問題か。興味深いことである。

なつのちから

本田瑞穂

まさに夏だ。なかはられいこに強い光が当たって乱反射しているようだ。あるいはなかはら自身がスプリンクラーのように、あたり一面に輝く水を撒き散らしているかのような。

スタンプを集めてもらう真空地帯
窓口に並ぶ酸素をもらうため
懸賞で当たった星の滅びかた

〈真空地帯〉〈酸素〉のいずれも〈もらう〉ものである。〈スタンプを集めて〉だから、〈真空地帯〉は、おまけである。生物の生命維持に不可欠な〈酸素〉は配給制のように並ばなくてはもらうことができない。そしてついに〈懸賞で当たった星〉は、滅びてしまう。ただ単に滅びる、ではなく〈滅びかた〉と結ばれているところがそこはかとなく怖い。

UV対策終わりましたか有事です

一読、朝の駅前の誰も聴いていない街頭演説を思う。外はもう夏の日ざしだ。日焼け止めは塗っていますか？そして、同時にこの国のとるであろう〈有事〉に対する〈対策〉も思わせる。目に見えない紫外線対策をちゃんと済ませていないといけない。〈有事〉なのだから。

こんなふうになかはられいこは、目に入ってくる強い光をきちんとあるべき方向にはねかえそうとしていると思う。

かゆいとこございませんかと追ってくる

この句がいちばん好きだ。美容院でシャンプーされているときの美容師の言葉づかいには、ひどく違和感を覚える。その奇妙な敬語で、指で、〈かゆいとこ〉がないか〈追ってくる〉。コンビニ、ファーストフードショップ、あちこちでおなじような場面はまさに〈追ってくる〉のだ。現代の日常のなかの異常をうまく言い表わした一句だと思う。

エプロンと海岸線をつけたまま

日常と非日常を〈つけたまま〉いったりきたりする姿が見える。なかはらの言葉そのものはとてもしっかりはっきりくっきり言われているようなのだが、こうやって読んでいくと行きつ戻りつしているのが見えてくる。

五つ星貼ってあるから泣かなくちゃ

前号に〈みんな泣くときに泣くこと難易度5〉という作品があった。掲出の句も、おなじような印象を受けた。あまりに必死にはねかえそうとして、あまりにまっとうすぎる球がくるときがあるような気がする。しかし、そのはねかえそうとする力そのものがなかはられいこの特徴だと思うし、魅力だと思う。この夏のような力と自分でもたたかいながらの日々なのだろうと思った。私もこの力にとても魅力を感じる。

欠点をひとつあげれば夏ですね

壜の中身を当てたら怖い

丸山　進

なかはらの句には観客をおやっと引きつける楽しさがある。

欠点をひとつあげれば夏ですね
窓口に並ぶ酸素をもらうため

〈欠点〉と〈夏〉のそして〈窓口〉と〈酸素〉の取り合わせに意外性があり、そのとぼけた味に、「ギラギラ迫る夏は嫌だな」とか「酸素か俺も早く並ばなけりゃあ」と知らぬ間に妙にその気にさせられてしまう。

UV対策終わりましたか有事です
ファスナーを下げて引きずり出す国家

なかはらは社会吟なんて構えず、普通の生活者として理不尽なことには黙っていない。〈UV対策〉は有事を待望してる人達が、何が有事か判断する虚構をシニカルに突いている。〈ファスナー〉は言ってくれるじゃないか、と思う。国家なんてものは、民から奪うだけで、雀の涙さえ与えない如何わしいものであることを、こんな形で涼しい顔して、ばさっと切りつけるのは痛快である。

俳句は（多分）書けそうなことを書くが、川柳は書きたいことを書く、書かねばならないことを書く、書けないことなんか何もない。と言うなかはらの気概がこの句にはある。

寄せて上げて寄せてきれいな月つくる

〈寄せて上げて〉なんてセリフで、観客の動機不純な反応を誘うところが憎い。引きずり込まれた後で、きれいな月を見せられては、誰もぼったくりなんて文句は言えないのだ。

なかはらはサービス精神旺盛で、次々新しい芸を見せてくれる。アクセルを踏みっぱなしみたいで、見てる方が大丈夫かなとハラハラする。このエネルギーの源泉がどこにあるのか誰もが不思議に思ってる。『夕鶴』のつうには「小屋の中を絶対見ないで」と言って、自分の羽を毟って反物をせっせと織る裏技があったが、なかはらにはそんな隠れ家はない。

それどころか脱衣場や飼い犬との日々の会話まで曝け出している。物理的には、羽は勿論、肉や骨まで削らなければ、そのエネルギーは続かないはずだ。でも、なかはらはむしろ、この状態を楽しんでる風にさえ見える。

懸賞で当たった星の滅びかた

もしかして〈星〉の欠片を食べて無限のパワーを出してるのかもしれない。でも回りが、このミステリーを詮索してばかりいると、全く意外な素顔をふいに見つけ驚愕させられる。

お別れね　壜の中身を当てたから

なんて、突然言われ蜃気楼のように逃げられてしまうのだ。怖いですね。そして当のなかはらは「やってられねえっ！」とちゃぶ台をひっくり返して、後は近所付き合いの良い、かわいい奥様にちゃっかり納まって、にこにこしてるのだ。

ミューゼスC計画

峯　裕見子

泣き声の滞空時間計測中

「二時間四十分か。今日はちょっと早いな」とつぶやきながら、ナカハラ博士は本日の気温と湿度を記録し、雲の具合を見てからタバコに火をつける。昼のパスタを茹でるために、ストップウォッチは首から下げたままだ。近頃の博士は忙しい。午後も三箇所ばかり計測に出かけなくてはならない。

泣き声は次第にその色と形を失って、やがて消えた。

球根の過去を暴いているテレビ

〈球根〉の一語が下の七・五の俗な日常を蹴っとばす。テレビが誰かの過去を暴くことは、もうみんなゲップが出るほど普通になっていて、「意外な事実」も、「赤裸々な告白」もコンビニの弁当みたいに見える。この春に埋めた球根がどんな色の花を咲かせるか、その方がドキドキするよ。

ファスナーを下げて引きずり出す国家

れいこ作品に批評と笑いの要素が強くなってきたと思う。以前から、無邪気な少女のような語り口で批評の対象に人さし指を突き立てるような句はあったが、その指すところが変化し、注入される毒も強くなった。冷静なおとなの目で我々の国家のうさん臭さとがらんどうかげんを見ている。そのくせ自分達のことを、「女の子」と書いたりするから、それには関西人の常として、「女の子ちゃう。おばちゃんや」と突っ込みを入れたくなるんだけどね。

ではアマリリスから準備体操、はじめっ

いつもながら元気に弾けている。アリスの世界に住む動く花・もの言う花と共に跳ね回り、屈託を見せないれいこ。

さかさまのことばが映る水たまり

アマリリスの句とくらべると、印象は「静」である。どちらも彼女の世界だが、臆病で籠りがちなれいこの本質のようなものを感じさせる句だ。才気煥発。たばこ片手にびしびしとものを言うように見えるれいこらしさは、彼女が彼女なりの努力で身につけたものだと、私は思っている。

懸賞で当たった星の滅びかた

二〇〇二年晩秋、鹿児島県の宇宙化学研究所から打ち上げられるM－Vロケットには、太陽系惑星探査機ミューゼスCが搭載される。応募・登録した一般人の名前も探査機に載っかって小惑星への旅に出るのだそうだ。そのミューゼスCが還ってくるのは二〇〇七年。その頃には、川柳や川柳界にどんな変化が起きているのだろうか。あるいは、なにが変わらないんだろう。なかはられいこに関して予想できるのは、円熟期を迎えた彼女が、それでも妙に落ち着いてしまわずに川柳を詠み、文章を書いているだろうということだ。相変わらず前髪に風を受けて走っているんだろう。

ハラ・クラのいろいろReview

▼注目の新川柳誌☆創刊ラッシュ！

「双眸」0号
「水脈」創刊号
「バックストローク」予告

二〇〇二年六月、青森の矢本大雪氏編集、野沢省悟氏発行の「双眸」という川柳誌が刊行された。正しくは、準備号。来年一月の創刊に向けての、いわば「お試しセット」である。とはいえ、全59ページ、全国から寄せられた100名近い協賛作品とその鑑賞（俳句と川柳から三名ずつの書き手が登場、クロスオーバーな選と鑑賞が展開されている）、「北の国から川柳を語る」と題された座談会、句集・評論集に対する書評、矢本氏による評論と、その厚みはただごとではない。これを以て「0号」とする両氏のしずかな自負が伝わってくる。

★

八月、北海道の浪越靖政氏編集による「水脈」第一号が発行。先日廃刊になった「あんぐる」のメンバーが中心になった15人の同人が横並びで、代表を置かないというシステムが、表紙の水色同様に涼しげである。

「双眸」同様、同人作品に対する作品評も同じ号に収録。「WE ARE！」でもこだわっている「作品とその鑑賞が同じ号に掲載」というシステムが、今後のスタンダードになっていくのかも……。

★

そして、来年一月の創刊に向けてその全貌が明らかにされた、石部明代表の「バックストローク」。「川柳刷新に向かって研鑽する集団であると同時に、個の自由を尊重し保証するグループとして出発させていただきます（石部明）」。

同人自選の aqua-notes、石部明選による同人・会員投句欄 wind-notes のほか、創刊号の評論・エッセー欄では、堀本吟・渡辺隆夫・広瀬ちえみ・石田柊馬・樋口由紀子各氏がペンをふるう予定。鮮烈で力強い泳ぎに期待は高まるばかりだ。

★

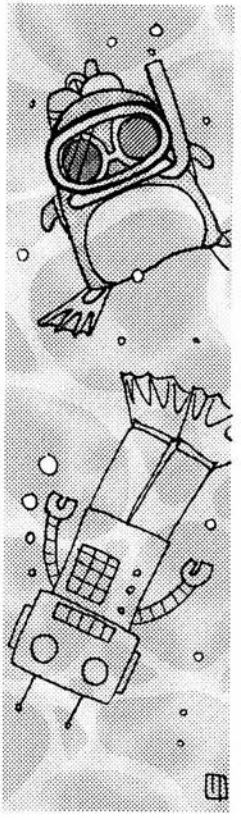
「双眸」隔月刊
電話　0170・27・8147
幹事／年会費15000円
会員／年会費9000円
振替口座／02290・1・59449
口座名義／川柳双眸社

「水脈」季刊
浪越靖政 yasumasa7353@msd.biglobe.ne.jp
年間購読料／2000円
振替口座／02750・4・36230
口座名義／一戸涼子

「バックストローク」季刊
石部明　akuru@mx3.tiki.ne.jp
同人／年会費15000円
会員／年会費　6000円
振替口座／01760・8・22174
口座名義／バックストローク

俳人・歌人・川柳作家ゲストによる
倉富洋子作品鑑賞

人見知りの吸血鬼だったかもしれない夏に



夏のおわりになると、
たくさんの
「だったかもしれない」が
ぷかぷかうきあがってくる。

夜の川面とか
ゆうがたの市民プールとか
昼下がりのアイスティーとか
献血車の採血パックとかのなかに
ぷかぷか。ぷかぷか。

☆

今年の夏は
わたしにとって特別な夏だった。
だけど、考えてみれば
「特別じゃなかった夏」なんて
いままでただの一度も
迎えたことがないのだった。

わたしの３６５日は
いつだって夏を中心に
回っているのだということを、
思い出したり、
忘れたりしながら。

ぷかぷか。ぷかぷか。

んーと

遠藤　治

倉富洋子の句は内省的なたたずまいがある。頭で作った句であったとしても、からだのどこかに名付けられるのを待っている感じ方があらかじめあって、丁寧に言葉を選んでそれを表現しているように思われる。恐ろしいスピードで意外性と理不尽がまき散らされるなかはられいことは対照的で、この二人が名コンビを組んでいるのだから世の中は面白い。

コンセント抜くと濁音たちこめる

冒頭から〈濁音〉である。不吉である。電化製品を止めたとき、それまで潜んでいた情念が動き始める。

忘れないようにリュックに詰める耳

連句のように〈濁音〉から〈耳〉に連なる。リュックの中でも〈耳〉は世界の音を聴き、リュックから出されるのを待っている。表現されるときを静かに待つ暗いリュックの中を思う。

さあ次はあなた、と渡されるトマト

この他者の現れ方は怖くてしかも優しい。〈トマト〉を〈渡され〉ない限り外に出ることがなく内部で熟成され続けるであろう言葉たちのことを思う。〈トマト〉がどこまでも鮮やかでみずみずしい。

君の手の中の朝日が正解です

〈朝日〉というのだから闇からの希望に満ちた脱却である。しかも〈手の中〉ということは体験したばかりのからだの中にあるのである。これほど喜び溢れる〈正解〉はあるまい。

犯人で満室になる夏の午後

〈夏の午後〉に宿を借りるような人間は例外なく犯人であり、しかも空き部屋がない。くらくらするような人間の性である。

罫線をはみだしていく「ごはんですよ」

〈「ごはんですよ」〉は母の呼び声とも海苔の佃煮の商品名ともとれるように書いてある。とはいえ仮に後者であったとしてもそれは母の書く家計簿上のことであろう。名状しがたい茫洋とした母性のゆらぎが、短詩系でしか定着し得ない仕方で捉えられている。

「んーと」のすきまにとりあえずパセリ

このへパセリ〉は、そこに表現されるべきものがあることを示す記念植樹なのだろう。〈「んーと」〉の先こそが楽しい。

するする　ていだきねこ

ゆるぎなく愛されミントガムがきらい

うわ、こまったな。ついさっき、なかはられいこさんの方の鑑賞文を倉富さんに送信したのだけれど、タイトルを「スースーします」にしちゃった。薄荷の清涼感だいすきなんだもの。倉富さん、スースーするものダメなんだろうか……。

いや、たぶん違う。もしかしたら、ミントガムを噛むのもたしかに苦手なのかもしれないけれど、この句のミントガムは、恋人がくちゃくちゃしているそれなのだろう。自分以外の人の口から、意外なタイミングでキシリトールガムやホールズのにおいがただよってくると、たしかにたじろぐものがある（薄荷フリークとしては自戒すべきところでありますな、うむうむ）。恋人はつるつるに髭を剃って、念入りに寝癖をなでつけて、あるいはなでつけそこなって、一部異様にペッタリなんだけど先端部の暴走はいかんともしがたい形状の頭髪ひとふさと共に、目をかがやかせて今日の逢瀬にかけつけてくれた。うれしいけれどもかわいいけれども、なんとなく「んーと」と間合いをとりたくなるところもあるような、でも、ま、うれしい、か、な。

ってな内心はおくびにもださずに、無垢にほほえんで、ますますゆるぎなく愛されてしまうんだろうか、ツワモノだ。

雨が生まれる場所です全席禁煙です

ミントガムのように、「他者がおしつけてくるもの」が他にも沢山とらえられている。〈**さあ次はあなた、と渡されるトマト**〉（い、いったい、何をさせようというんだっ）、〈**君の手の中の朝日が正解です**〉（なにも正答を狙うつもりじゃなかったのでは？）、〈**犯人で満室になる夏の午後**〉（人はいついかなる権限のもとに他者を「犯人」よばわりするのか）、〈**黄昏はマナーモードにして下さい**〉（ずいぶんキッパリもうしわたしてくださいますが、でもさ……）、

でもさ、でも、それじゃおうかがいしますけれど、「マナー」って一体なんなんですか？

いかんいかん、どうもワタクシメなどは短気で、すぐに気色ばんでしまう。こういうのは全然クラトミ流ではない。

掲出句の「全席禁煙です」なんてのは、さあありがたがれ、身をつつしめと言わんばかりの、もっともウザイおしつけなのだけれども。クラトミ流家元は、けっして聞きのがさず、けれどもあっさり受け流して、うまれたばかりの雨粒たちを感受することにもう夢中になってしまっているようだ。

作者像はごくごく内気な女の子なんだけど、もっさりしたところはなくて、身ごなしはとても軽やかだ。この軽快さも、川柳という詩型の大きな強みのように思われる。

〈ぐるぐる〉しながら

本田瑞穂

コンセント抜くと濁音たちこめる
忘れないようにリュックに詰める耳

一連のはじめからつっ、とつまずくような感覚を持った。コンセントを抜いてしまえば雑音がたちこめる。外に出るときは、〈耳〉は忘れないようにリュックに詰めていかなければならない。〈耳〉は機能不全に陥っているようだ。

昔話しようか雨季が終わるまで
さあ次はあなた、と渡されるトマト
「んーと」のすきまにとりあえずパセリ

〈とりあえずパセリ〉なのだ。昔話もトマトを渡されることも〈とりあえず〉されることのような印象を受ける。そして、トマトはまた次の誰かに渡されるのだろう。何かが始まる、生まれる、あるいは終わる、というような明確な気配がない。しかしこのような不全感、停滞感を、現代という時代を生きている私たちは十分知っているはずだ。

無声映画のなかではきよらかな海月
雨が生まれる場所です全席禁煙です

それでも少し存在する美しいもの。しかしいまや、海月がきよらかに見えるのは昔懐かしい〈無声映画のなか〉だけであり、〈雨が生まれる場所〉では〈全席禁煙です〉と断らねばならない。〈海月〉の漢字表記が効いている。

ゴドーはもう来たんだ　だって、ほら、真夏

これだけの停滞感を漂わせていながら、〈ゴドーはもう来たんだ〉という。真夏の真昼の真っ白な風景。ほんとうは来てないんじゃないか。それとも来たあとにもたらされたものは、この真っ白なにも動く気配のない真夏だったのだろうか。〈**君の手の中の朝日が正解です**〉も、一見あかるい句に見えるが、この句とおなじように「だから正解はどこ？」と問いかけたくなる。

ぐるぐるのつづきはまた次の夏に

ゴドーが来るのが明日になると知って、一幕を閉じるときのようである。二幕があいてまたおなじ〈ぐるぐる〉がはじまる。そんな風に私たちの日常も続いていくのだろうか。

万緑をめくるとヴァンパイアの卵

もしかして、〈万緑〉の裏側に潜んでいる卵から孵ったヴァンパイアが成長して、いつかやって来るのかもしれない。そうなったら世界はどうなるのだろう？　それは誰にもわからない。わからないけれど、倉富洋子はこれからもこうやって〈ぐるぐる〉しながら、川柳を書き続けていくのだろう。現代という時代を生きて。

倉富洋子を読む

加藤治郎

身勝手な感想だが、写生からの距離ということを思っている。子規の〈実際の有のままを写す〉ということである。もちろん写生を推奨しているわけではなく、実際の有のままを写すことの疑わしさも承知している。作者は〈実際の有のままを写す〉ことでは、作品が成立しないと考えている。それがイメージの飛躍や捻れをもらたしている。これは、なかはられいこの作品にも共通して受ける感じなのである。そして、どうもそれがときおり強迫観念のように見えてしまうのである。有りのままじゃいけない。なにか普通じゃないものを提示しなきゃいけない。そんな意識はないだろうか。

忘れないようにリュックに詰める耳
君の手の中の朝日が正解です
慈悲深いメロンに見逃してもらう
万緑をめくるとヴァンパイアの卵
柑橘系あたりの路地で待っててね

いずれも面白い作品である。〈詰める耳〉〈正解です〉〈慈悲深いメロン〉〈ヴァンパイアの卵〉〈柑橘系〉これらは、みな捻れの要素となるものだろう。しかしこの奔放な語句にかえって窮屈さを感じてしまうのだ。とりわけ〈万緑〉の句は問題作である。〈めくる〉という感覚が冴えているし、緑の残像に白い卵が映えているイメージは卓抜といえる。ポエジーはこういうところにあると思うのだが、ヴァンパイアを登場させないと作品は成立しないものだろうか。吸血鬼というテーマ性から導かれたものであろうが、この場合、ヴァンパイアのインパクトが強すぎて〈めくる〉の感覚や〈卵〉の映像美が薄まっているように思われるのだ。

コンセント抜くと濁音たちこめる
謝っておく水玉になる前に
無声映画のなかではきよらかな海月
はちみつの午後かんぺきなわたしたち
「んーと」のすきまにとりあえずパセリ

こんな作品がよいと思って読んだ。〈濁音〉〈水玉〉〈海月〉〈はちみつの午後〉〈パセリ〉あたりにポエジーの核がある。先ほど引いた句と比べて微差ではあるが、これらはナチュラルである。飛躍しなきゃというような感じから自由である。中でも〈パセリ〉の句は秀作である。ほんの短いためらいの時間がある。それを視覚化した。〈パセリ〉のニュアンスが豊かである。その鮮やかな緑と、苦い感触が一瞬の心の揺らぎを受け止めた。〈とりあえず〉の間合いも巧く、句の流れに変化をもたらした。

飛躍や捻れをいかにナチュラルな感覚に繋げてゆくか。そんな方向を期待したいと思うのだ。

吸血鬼のひとりごと

丸山　進

倉富にはかつてあるイメージが定着してた。それは硬質、エリート、キャリアウーマン、プラチナ、完璧、等である。確かにと思えるところもあるが、多分、もっと違う面もいっぱいあるはずだし、本人もそのことを気にして観客のマインドコントロール解消に努めてるように思える。

コンセント抜くと濁音たちこめる

文明社会を崩壊させる革命もテロも一つのコンセントを抜くだけで出来てしまう恐さと脆さをさらりと表わしている。

忘れないようにリュックに詰める耳

いろいろいろ言ったり聞いたりしてる他人の耳をリュックに詰めるのはとてもミステリアスである。これを持ち帰り、今までの倉富なら、もう一度聞き直すだろう。

でもこれからの倉富は気にしないで犬の餌にするか、穴に埋めてしまうだろう。倉富は今壊れ出している、そして、回りにも逆襲を始めているのだ。

昔話しようか雨季が終わるまで

謝っておく水玉になる前に

柑橘系あたりの路地で待っててね

肩の力を抜いたこんな句にはほっとする。迫力とは無縁だが柔軟剤を混ぜたような表現に癒されるのは確かだ。

どこからかマドンナ倉富のラバイが聞こえてくる。

無声映画のなかではきよらかな海月

きれいではあるが〈**無言電話の向こうに月は出ているか**〉の名句に発想が似てるし、インパクトも負けていると思う。

犯人で満室になる夏の午後

はちみつの午後かんぺきなわたしたち

〈犯人で〉は緻密に計算された完全犯罪を思わせるし、〈はちみつの〉は殺意を伴う不倫を思わせる。どちらも歪んだ都会の閉塞感と退廃の匂いに満ちた句である。

本人の意識の内にはないかもしれないが、倉富に潜在する未消化の不道徳部位が何かに共振してるような感じがする。

「んーと」のすきまにとりあえずパセリ

ゴドーはもう来たんだ　だって、ほら、真夏

ここではナンセンスゾーンに踏み込む冒険をしてるが、語の選択と配置は計算されており、言葉やリズムは生き生きしている。だから演歌歌手が宇多田ヒカルの真似をするような不自然さは全くない。

ぐるぐるのつづきはまた次の夏に

倉富の挑戦は進行中である。同時進行の多面作戦により、どんな風にイカレたり、進化していくのか興味は尽きない。

さて次の夏、倉富が保健室の先生になってるか、サーカスで空中ブランコに乗ってるか、△△かは誰も分からない。

とりあえず、クラトミ

峯　裕見子

さあ次はあなた、と渡されるトマト

で、そのトマトをどうするか。食べてしまうとは思えない。〈次はあなた〉には、行動を促がそうとする静かな強要の匂いがある。何かに、あるいは誰かに向けて投げつける赤い礫としてのトマトか。それを渡された人の表情は見えなくて、声も聞こえてはこないのだが。

コンセント抜くと濁音たちこめる

繋がっているあいだは聞こえなかった音。聞こうとしなかった音。それがゆっくりと押し寄せ満ちる。ザ行もガ行も部屋から溢れて、廊下までいっぱいだ。耳を塞いで我慢するか、ふたたび繋ぐか。われわれの日常はこんなもんですとあきらめようとする耳へ届くのは、放送の終わったテレビの砂嵐。

罫線をはみ出していく「ごはんですよ」

私自身の日常に、この句が被って笑ってしまう。二階にいる娘達を「ごはんよー」と呼ぶ。……（降りてこない）「ごはんできたよ、早く食べよう」。……（まだこない）「ご・は・んっ！　食べるの食べないの！」と叫ぶ。かくて、芋の煮っころがしもそうめんも団欒からはみ出して、どこかへ行ってしまったよ。

昔話しようか雨季が終わるまで

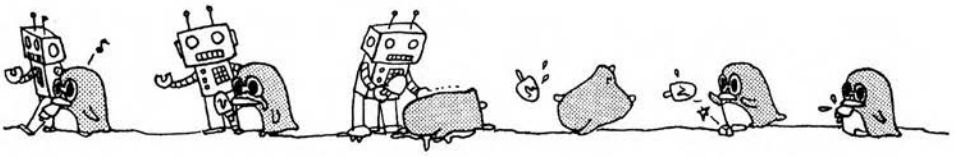
出かけなくてもいい日の雨は好きだ。晴天の日は心が体から出て行きたがって、どうもいけない。うちの便所の壁に掛けてある浄土宗カレンダーの「六月の言葉」は、「雨の日には雨の日の生き方を」だ。あと四日ばかりは、その標語を眺めながら用を足す。懐かしさに縋って過ごした時間は、痛みを和らげてくれただろうか。この作品の中に降る細かい雨に、私もしばらく濡れてみる。

「んーと」のすきまにとりあえずパセリ

倉富洋子の川柳のファンは多い。短歌や俳句に比べて、若い人の少ない川柳界で、早くからその感性や豊穣な言葉に対する評価は高かった。若いけれど、彼女の書くテーマは軽薄なものではなく、しんと自分の心をのぞき込んでいるうちに、完成度の高い重量感のある川柳が、結晶となって、洋子さんの口からこぼれ出てくるように見えたものだ。以前は、掲句のような軽やかな作品は、あまり見られなかった。昏い水底に足が着いて、ぷかんと浮き上がった状態が、彼女の現在なのだろうか。

作品が変様することは、読み手にとっては面白いことでもあるが、それを喜ぶ人ばかりではない。いつまでも「プラチナの洋子」であることを望む声もあるだろうが、色々とやってみればいいと思う。自分が書きたいように書いているうちに、揮発し沈殿し、確かなものが残ると思う。

ゲスト作品



俳人&歌人ゲストが詠む川柳

★俳人★

燻製に沿ひ真空を切取りぬ　遠藤　治

はっけよいのこったら面倒だもの　ていだきねこ

★歌人★

通天閣の雨の別れとなりにけり　加藤治郎

もういらない携帯電話のストラップ　本田瑞穂

ゲスト・プロフィール

▼俳句

遠藤　治（えんどう・おさむ）
一九五八年生。東京都在住。
俳号：四童（よんどう）。
「恒信風」「豆の木」所属。

ていだきねこ
一九六一年生。広島県在住。
「恒信風」「かばん」所属。

▼短歌

加藤治郎（かとう・じろう）
一九五九年生。愛知県在住。
未来短歌会に所属。
88年『サニー・サイド・アップ』にて現代歌人協会賞。99年『昏睡のパラダイス』にて寺山修司短歌賞。

本田瑞穂（ほんだ・みずほ）
一九六四年生。新潟県在住。
「かばん」所属。

▼川柳

丸山　進（まるやま・すすむ）
一九四三年生。愛知県在住。
「川柳大学」会員、「ラエティティア」所属

峯　裕見子（みね・ゆみこ）
一九五一年生。滋賀県在住。
「川柳大学」会員、「番傘川柳本社」、「びわこ番傘」同人。

仮面

遠藤　治

一冊と一着を持ち春野かな
どの蝶も初蝶なりとのたまへり
種を蒔くポール・マッカートニーかな
日曜を吊してゐたるアドバルーン
春昼や妄想の後よいしよと言ふ
春の夜を送信したるボタンかな
石鹸のかたちに戻る包み紙
永き日の保健室にて忘らるる
怪我人のやうな仮面や夕薄暑
自転車の重なつてゐる青野かな

やや沈下

ていだきねこ

夜桜やまばゆきものが背を濡らす
春宵や三段折れのかげぼうし
菜の花や学校の窓つぎつぎ開く
ゆびさきの血のつぶひかる五月かな
リュックサックにポケット数多子供の日
鯉幟こたえるならば狂うまで
天国は今朝やや沈下桐の花
緑蔭を踏みだしてこちらから抱く
君は目をほそめて黙す藤の昼
みななにかやりかけにして心太

セル

加藤治郎

風のつよかった一日スプーンが音符のように置かれるゆうべ
だしぬけにきみはコップに字を書いた真冬の水のように激しい
ゆうぐれはガーゼのように抱きあって絶望なんて希望だなんて
体中ゆれているのに夢だろういけないよってきみは囁く
その力、メトロノームのたしかさでぼくに伝わる朝焼けがきて
あきらかにスーパードライのぎんいろの音が響いてきみが壊れる
アスパラは炙られてありあかあかとふたりフーリガンに囲まれてたのしい
沼をゆくカヌーのように時は過ぎあなたが先に電話をきった
ニッポンニッポン遠く画像の冴える夜(よ)にやすっぽいペニスである俺は
横書きのアラビア文字のしなやかにきみが反るとき明け方の風

真昼の月

本田瑞穂

誰も知らないことなのに両腕に鳩をあつめるあのおじさんは

ハンドケア無料サービス実施中さしだしているおんながひとり

なんでもない、なんでもないと指のはらハードカバーにおしつけて読む

エレベーターぽっかり浮かぶ連れだって真昼の月へむかうみたいだ

降るようにとりかこまれたサラウンドサウンドここにいることさえも

ややななめ下にあるものいっしんにおんなのこたちみつめています

しらがあたまのおとことおんなのまちあわせどこにも区切りのない青い空

眠る前顔を洗っている母の音まだなのかもう終わるのか

いつのまにみどり並木は気がついたわたしに恥ずかしいことばかり

駅ビルの案内嬢は目印となって尊い帽子を被る

気まぐれな関係

丸山　進

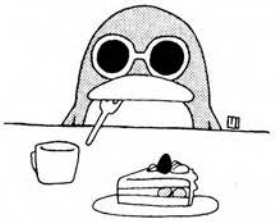
点線の関係だからしかたない
友達をある順番に並べてる
大抵のことはバナナでケリが着く
目を見ると負けそう鼻の穴を見る
キムタクと同じ形の鼻の穴
体毛の存在価値を考える
悪いことすればと金魚つぶやいた
空き瓶を持ち上げ雌雄確かめる
長い目で見れば真面な顔になる
つまらない物を分母に持ってくる

五黄

峯　裕見子

あなただとひと目でわかる目出し帽
転生の果ての喋らぬ鸚鵡かな
吊るされた肉ゆっくりと揺れており
許してくださいと豆腐から水が出る
うれしさに縮んでみせるアメフラシ
借金で買った車に貼るお札
著莪（しゃが）の咲く谷で生者を待っている
片方も赤を揺らして泣くらしい
ここだけが少し湿って明るくて
今日はいちにちカトちゃんの髭になる

ハラ・クラのいろいろReview



▼俳句ＶＳ川柳
現代俳句協会青年部勉強会

俳句＋川柳句会

10月12日（土）、東京都台東区民会館での第73回現代俳句協会青年部勉強会「俳句＋川柳」句会に、倉富が参加。勉強させていただく。

第一部は、俳人の仁平勝氏による講演。川柳と俳句の差別化を考えるためには、それぞれの発生に遡る必要があるという導入部分から、「俳句も川柳も時代とふれあうために現代詩の影響を受け始め、それによって両者が似てきたのではないか」「俳句は疎句（はなれすぎ）に傾きやすく、川柳は親句（つきすぎ）に傾きやすい」という説まで、わかりやすく興味深い内容だった。今度はぜひ川柳の会で氏の講演を聴きたい。

第二部は、俳句・川柳入り混じった句会。参加者は俳句一句、川柳一句を持ち寄り、清記された全投句のなかからそれぞれが「俳句としていいと思う句」「川柳としていいと思う句」各三句を選ぶというシステムである。

他ジャンルの句会に川柳作家として川柳を提出し、川柳作家として川柳を選句する……。

「ＷＥ　ＡＲＥ！」でも超ジャンルの句会を展開しているが、わたしたちの場合は作句の際も選句の際も川柳・俳句を区別しない方針。こんなふうに「川柳として作句する」ことや「川柳として選句する」ことによって、自分自身の「川柳」と改めて向き合う作業は、すごく新鮮でおもしろかった。大いに悩みもした。

今回、川柳としていちばん点を集めたのが、今号の川柳ゲストでもある丸山進さんの〈**引出しに居場所がないか開けて見る**〉という句だった。一読明快でおもしろく、仁平さんの「川柳は言い尽くす」という論にもかなった句である。

「だけどこういう句は川柳大会では入選しにくい」という指摘が、会場の伊藤博さんから。うーん、確かにそうかも。大会にもよるだろうけれど、一読明快な句よりは詩的飛躍が感じられる句の方が大会では「つよい」印象がある。

川柳書きが考える川柳と、川柳書き以外が考える川柳のちがい。川柳書きのなかで「川柳」に関する統一見解をつくることすらおぼつかないほど「川柳」が拡散したいま、川柳書きはなにをすべきなのか。宿題をたくさん貰った勉強会だった。

（倉富洋子）

なかはら＆倉富が読む

ゲスト作品

なかはられいこ

すべてのものの輪郭が、
背景にまぎれてしまいそうな黄昏の雑踏で、
たったひとりの顔を見つけだす。
チューニングしそこなったラジオの
ノイズの砂にまみれた
たったひとつの単語をすくいとる。

見つけだした、と思うのは錯覚で、
ほんとうは、向こうからやってくるのかもしれない。

やあやあ。
ひさしぶり。
近頃どうだね。

かけがえのないものは、
じつに誠実に存在を主張する。
トンネルの壁のチョークの印のように。
朝焼けの給水塔のように。

倉富洋子

「王様の耳はロバの耳」
いままであんまり疑わずにきたことを、
ふと思い立って
確かめるための旅に出ることにした。

旅といっても、
目的地は出発地点と
そう遠くはないところにあるのだけれど。

自分の目で確かめた王様の耳は……、
あれは……、
実は……、

衝撃の新事実は次号！（うそ）

遠藤　治作品「仮面」鑑賞　▼▼▼▼▼　なかはられいこ

すっきりあと味、淡麗〈生〉

遠藤さんの俳句はおもしろい。たいていの人はおもしろいことを言うときには、おもしろいことを言おうとするあまり声高になったり小鼻がピクピクしたりする。結果、本人が思っているよりおもしろくなくなる。ところがこの人は表情も変えずに淡々とおもしろいことを言うのだ。わざとらしさを感じさせないのは、この作者の美質であろう。

春昼や妄想の後よいしよと言ふ

なにが〈よいしよと言ふ〉だ。どんな妄想なんだ、いったい。しかも旧仮名だし（笑）。とツッコミを入れたくなるほどとぼけた句である。〈春昼〉の物思いは妄想に暴走しがちだ。よからぬ思いに突っ走った後、〈よいしよ〉と掛け声をかけ、重い身体を持ち上げて立ち上がる。げんじつというやつに向かうために。実にけなげで、だからこそおかしい。

春の夜を送信したるボタンかな

メールの送信ボタンをクリックする。受信した相手はうろたえるだろう。〈春の夜〉なんて胡乱なものが送られてきたひには。しかもこの人は受け取る相手のことなんかぜんぜん眼中になくて、送信したあとの〈ボタン〉そのものに気を取られているのだ。……ボタン。思わずひるむ、私。

永き日の保健室にて忘らるる

あんまり淡々としてて存在感がないから、忘れられてしまったらしい（笑）。貧血体質の私は、中学でも高校でもよく保健室のお世話になった。窓からピアノの音や、運動場の「ファイト！ファイト！」という声がとぎれとぎれに聞こえる。消毒液の匂い。固いベッドの感触。自分だけが世界から取り残されたような、少し甘くて淋しい時間。このままみんなが私を忘れて帰ってしまったらどうしようと思った。休み時間に仲良しのともだちが様子を見に来てくれると心からホッとした。しかし、遠藤さんはこんな時でもあまり不安に思ったりはしないらしい。〈忘らるる〉という、まるで他人事のような言い方。事態を諦観しているとしか思えない。さすが男の子である。（そうか？）

自転車の重なつてゐる青野かな

ビジュアル的には少々既視感はあるけれど、春の野原に折り重なる自転車はシュールというより、牧歌的なイメージがあって好きな句だ。少年たちがちょっと乱暴に乗り捨てて、そのままどこかに出かけたみたいな。彼らは彼らのイニシエーションのため、死体探しの旅にでも出かけたのかもしれない。「スタンド・バイ・ミー」の少年たちのように。そして彼らの消えたこの〈青野〉は、冒頭の〈一冊と一着を持ち春野かな〉の〈春野〉とどこかでつながっているような気がする。時空を超えて。

白を混ぜる

遠藤さんの十句を読んで、すごくひさしぶりに葉祥明の絵を思い出した。あの明るくやわらかな色使いが、遠藤さんの俳句に通じる気がして。絵の具のグリーンやブルーにすこしだけ白を混ぜた、おだやかで広がりのある色調。

遠藤作品をメルヘンチックとかなんとなく平和主義者っぽいというふうに読んでいるわけではないのだが、生きることに対する肯定的な視線は、やはりすごく似ている気がするのだ。作品のなかで、時間がひたすらゆっくり流れているように見えるところとか。

春昼や妄想の後よいしよと言ふ

〈春昼〉の〈妄想〉といえば、なんとなく『失楽園』とか『真珠夫人』とか、その種のものに流れがちな印象があるけれど、そんな（どんな？）〈妄想の後〉、現実モードに気持ちを切り替えるために発する言葉が〈よいしよ〉なのだという。

一読、〈妄想〉と〈よいしよ〉の温度差に笑ってしまったあとで、「確かに〈よいしよ〉も年寄りくさくてどうかと思うけど、そんなところでいちいち掛け声をかけるってのもどうよ？」なんてつっこんでしまいたくなった。まあ、そんなこと言ったところで、歴史的仮名遣いっぽい笑顔で、にこにことかわされてしまいそうだけど。

春の夜を送信したるボタンかな

とあるうららかな〈春の夜〉に、たいせつな誰かに送る電子メール。あるいは、ウエブの掲示板への書き込みだろうか。いずれにせよ、その文面にもやわらかに春が踊っていることだろう。パソコン画面の送信ボタンという無機質なアイテムをクローズアップすることで、尚更ふくいくとした春の情緒が香り立っている。

一冊と一着を持ち春野かな

「無人島に行くとき、あなたは何を持っていきますか」という質問には考え込んでしまうけれど、〈春野〉に持っていくものとして、読もうと思っていた〈一冊〉と〈一着〉の上着以外には考えられないではないか。ケータイやＭＤウォークマンや使い捨てカメラなんかは置いていこう。せっかく四季のある日本に生まれ暮らしているのだから、いま、そこにある季節を楽しもう。インドア派のわたしもこの句に誘われて、気がついたらスニーカーの紐を結び終えている。

自転車の重なつてゐる青野かな

みずいろの空、新緑の草原。薫る風。どこまでも行けるはずの自転車。遠くに聞こえる少年たちの笑い声。

これはわたしたちのなかに在る「永遠の野原」のイメージそのものだ。現実のどこにもないけれど、いつでもわたしたちの近くに在る。あの葉祥明の絵に描かれている、なつかしくうつくしいあの風景のように。

ていだきねこ作品「やや沈下」鑑賞 ▼▼ なかはられいこ

ロスト・ハウス／ロスト・ヘブン

菜の花や学校の窓つぎつぎ開く

この句を読んで大島弓子の「ロストハウス」というマンガを思い出した。幼稚園児の女の子と若いサラリーマンとの出合いから始まるその話は、居心地の悪い世界で居心地のいい空間を探すひとと、居心地のいい空間を開放しつづけるひとの物語だった。

木造平屋建ての古びた校舎、朝礼台だけがポツンとある無人の運動場。明るい春の陽光に揺れる菜の花。そんなのどかで平和な景色が浮かぶ。オルガンの音に合わせて合唱するこどもたちの声が聞こえてきてもよさそうなのに、つぎつぎと開く窓の向こうには不思議と人の気配を感じない。無人の校舎。窓を開いたのは建物の意志でさえあるような。そうなるとホラーなんだけど、菜の花も学校もひたすら明るい。〈開く〉という意志のせいだろうか。「ロストハウス」の最後には「わたしはわたしの前で世界のドアがとつぜん開け放たれていくのを感じていた」というモノローグがある。

天国は今朝やや沈下桐の花

天国は空の上にある。いや行ったことがないから天国というものがほんとうにあるのかどうかも知らないけど。たぶん作者も〈天国〉という概念にいささか胡散臭さを感じているのだろう。だって実体化（？）させようとするあまり、〈沈下〉させてしまうのだから。しかも、〈今朝〉〈やや〉である。この小技を駆使したリアルさの追求には、信じたい気持ちと信じられない気持ちのゆらぎを感じる。天国なんてはなっから信じていなければ、どすんと落として終わりにしてしまえばいいのだから。ちょっとだけ信じたい気持ちに〈桐の花〉はよく似合う。あの紫の花は天上から降ってくるのだから。

みななにかやりかけにして心太

ああ、いいなあ、こういうの。ホッとして涙が出そうになる。たとえば、お母さんがおやつに心太を作って「できたからおいでー」と家族を呼んだのだとしよう。お父さんは洗い終わった車にワックスをかけている途中だったのかもしれない。息子はゲームの真っ最中で、今まさにステージをクリアするところだったのかもしれない。娘は昨日ケンカした彼に「ごめんなさい」メールを打っている途中だったのかもしれない。そういうことをとりあえず、いったん保留にして、みんな集まってくる。だって「あとで」なんて言ってると心太は生ぬるくなっちゃうし、味が染み込みすぎて不味くなっちゃう。たいていのことは〈やりかけにして〉もだいじょうぶ、ということなんだ。高速で回転する世の中にときどき振り落とされそうになって泣きたくなる。そんなときにはこの句を思い出そう。

それにしてもこの〈心太〉、ものすごく効いてると思う。

ていだきねこ作品「やや沈下」鑑賞 ▼▼▼▼▼ 倉富洋子

きらきら・つるつる

九州出身のせいばかりでもなかろうが、寒さにからきし弱いわたしは、ゆくゆくは常夏の南の島で海を眺めながら暮らそうと、ひそかに心に決めている。だけど、そんな決意が揺らぐのは、いいなあと思う俳句に出会ったとき。無季俳句にも好きな句はたくさんあるけれど、有季定型はやっぱりうつくしいなあ、四季のあるニッポンを捨てられないなあと、うっとりしながらていだ作品を読んだ。

夜桜やまばゆきものが背を濡らす

〈まばゆきもの〉というのは、〈夜桜〉をライトアップしている公園の照明とかではなく、心象的なひかり、だろう。昼間よりも数倍自由な表情を見せる〈夜桜〉と、それをみつめるひとの背後から照射される、圧倒的なひかり。

とても映像的だし、その映像のイメージはどこか官能的。哲学的にも、ただもう圧倒的な恋の句にも読めて、〈夜桜〉ということばのひろがりを楽しんだ。桜の季節になるたびに、わたしはきっとこの句を思い出す。

菜の花や学校の窓つぎつぎ開く

学校というのは、昔も今もそれなりに楽しく、それなりにしんどい場所だ。だけど、はじまりのこの季節だけは特別。つぎつぎ開く窓へと流れ込んでいく菜の花の甘い香りが、「希望」とか「未来」とか「友情」とか、教室の後ろに張り出された習字の文字をきらきらと輝かせている。

春夏秋冬の順に季節はめぐるものだけど、それでも春は心はずむ季節。こんなふうに窓を開けて、いろんなことをすこしだけ信じてみようと思うのは、わたしだけではないだろう。

ゆびさきの血のつぶひかる五月かな

ここにも「きらきら」がある。針か、薔薇の棘か、そんなものでうっかり傷つけてしまった〈ゆびさき〉に、みるみるまるく盛り上がる〈血のつぶ〉。〈夜桜〉や〈つぎつぎ開く窓〉に比べて、〈ゆびさきの血のつぶ〉のひかりはしずかに昏い。五月のうっすらとした憂鬱を映し出すかのような、ためいきを内包した昏さが魅力的だ。

みななにかやりかけにして心太

そう。やらなくちゃいけないことはみんな山積みなのだ。目先の仕事とか、こまごまとした家事とか、締切を守ることとか、がんばって生きることとか。

そんなことをすべて〈やりかけにして〉、トコロテンをすすっている〈みんな〉。なんていうのかな、この〈心太〉は絶品。とりたてて栄養素もなく（食物繊維は豊富だけど）、小腹は満たすけれど満腹にはならない。食べても食べなくても大局に無関係なものをつるつる食べるためだけに、〈なにかやりかけにして〉しまう、そんな余裕と遊びゴコロだけは、終生忘れずにいたいなあと思う。

加藤治郎作品「セル」鑑賞　▼▼▼▼▼▼　なかはられいこ

ROMすれば朝焼け

「セル」と題された十首。細胞のセルとも、表計算ソフトのセルともいえる。私は勝手にエクセルのセルであるという前提で読ませていただいた。これは加藤さんがセルの幅や高さを調節して見せてくれたイメージである。無数のセルの中からひとつを選び焦点を絞る。ヒッチコックの映画「裏窓」で、双眼鏡を覗く人のように。

風のつよかった一日スプーンが音符のように置かれるゆうべ
だしぬけにきみはコップに字を書いた真冬の水のように激しい
ゆうぐれはガーゼのように抱きあって絶望なんて希望だなんて
沼をゆくカヌーのように時は過ぎあなたが先に電話をきった

〈音符のように〉〈真冬の水のように〉〈ガーゼのように〉〈カヌーのように〉と直喩がめだつ。しかし、喩えられるものはスプーンであり、きみの振る舞いであり、抱擁であり、時である。結びつけると特異な比喩なのに、特異さが少しも感じられないところがいちばん特異だ。

その力、メトロノームのたしかさでぼくに伝わる朝焼けがきて

気になる歌だ。気になるけれど、なんだか文体がヘンだ。だいたい、いきなり、〈その力、〉ってなに？　しかも読点つき。出会い頭にガツンとやられた気分だ。しかたない、とにかく読んでみようと観念する。どこで切ればいいのか迷った結果、〈その力、メトロノームのたしかさでぼくに伝わる／朝焼けがきて〉と切って読んだ。〈ぼく〉に伝わるのは〈その力〉ではないかと思ったから。連作の流れから推測すれば、〈その力〉は壊れる寸前の〈きみ〉の力なのではないだろうか。メトロノームのように確かな〈きみ〉の、たぶん性愛の、生命力が朝焼けを連れてきたのだ。

あきらかにスーパードライのぎんいろの音が響いてきみが壊れる

スードライはハードボイルドな味がする、と言う人がいて、飲めない私にもなんとなくわかる。〈ぎんいろの音〉を出すくらいだから、確かにマイルドでもファジーでもなさそうだ。〈あきらかに〉は〈響いて〉に掛かるのだろうけど、軽く〈きみ〉にも掛かっているのではないかと思う。「あきらかにスーパードライの音を響かせて、あきらかに恋人が壊れる」のだ。この〈あきらかに〉という圧倒的な断定のしかたに、とりかえしのつかなさを覚える。とりかえしのつかないことをくり返しながら、私たちは日々を生きているのだろう、セルの中で。

加藤治郎作品「セル」鑑賞　▼▼▼▼▼▼▼▼▼　倉富洋子

動画を描くための透明な画材

BookPark から出版された加藤治郎歌集『イージー・パイ』をはじめて読んだとき、激しい眩暈に襲われたのだ。たとえばこんな歌に。

〈荷車に春のたまねぎ弾みつつ　アメリカが見たいって感じの目だね〉〈マガジンをまるめて歩くいい日だぜ　ときおりぽんと股で鳴らして〉〈言葉ではない！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！　ラン！〉

そこに広がっているのは、一点の曇りもない青空だ、と思った。アメリカの青春映画の中でしか見たことがないような、疑いも迷いもない完璧なハイテンション・ブルー。だから、今回の作品群のしずかな混濁に、いささかホッとしたのだった。この青空なら、まぶしく見上げるだけではなく、共有できる部分が多い。

新作十首につけられた「セル」という題は、「cell ／①小部屋・独房②細胞③電池」「celluloid ／動画を描くための透明な画材」「sell ／売る・処分する」の、いずれにあたるのだろうか。加藤作品の完成度の高さはエクセル（表計算ソフト）のきっちりした罫線を思わせるが、作者にとって短歌というフォルムは、「動画を描くための透明な画材」なのかもしれない。川柳ではよく「映像が浮かぶのは佳句」だと言われるが、加藤作品ではその映像が実にいきいきと動いているから。「写メール」の先を行く「ムービーメール」のように。

アスパラは炙られてありあかあかとふたりフーリガンに囲まれてたのしい

ワールドカップ開催前にはあんなにも騒がれて厳戒態勢が敷かれていたのに、終わってみればまったくどうってことなかった〈フーリガン〉。だけど、この歌の〈フーリガン〉はどことなくＫＫＫを思わせる凶悪さだ。でなければ〈囲まれてたのしい〉はずがないのだから。危機的状況だからこそ、〈ふたり〉のたのしさや親密さはいや増していく。

アスパラを炙っている〈あかあか〉した炎や〈フーリガン〉など、極めて動画的な一首である。炙られているアスパラの香りまでが感じられそうだ。

ニッポンニッポン遠く画像の冴える夜にやすっぽいペニスである俺は

横書きのアラビア文字のしなやかにきみが反るとき明け方の風

狂騒的なＷ杯の渦からすこしはなれた位置でハードボイルドかつ自虐的な思索に耽るときも、性愛を謳歌するときも、それが加藤作品として結実すると、どの歌もごく短い映画のようだ。かつてのディズニーアニメは1秒の映像のために24枚ものセル画を描いていたが、加藤作品のセル画はさらに枚数を費やし、緻密に計算され尽くしている気がする。

本田瑞穂作品「真昼の月」鑑賞　▼▼▼▼　なかはられいこ

世界を肯定する哲学

好きだと思う歌や句には必ず「書かれなかったこと」がある。その余白にずっと惹かれ続けて、私はここにいる。

ややなな め下にあるものいっしんにおんなのこたちみつめています

不思議な感触の歌だ。激しく惹かれる。二箇所で助詞が省略されているために、このおんなのこたち（が、何かを）みつめているのか、おんなのこたち（を、何かが）みつめているのか、ぐるぐるくらくらする。私は、〈なな め下にあるもの（を）〉〈おんなのこたち（が／は）〉と解釈した。それにしても〈ややなな め下〉という場所の設定は不可思議だ。第一、何から見て〈なな め下〉なんだかさっぱりわからない。たとえばテレビCMに出てくる女の子たちや、グループ旅行の写真に映った女の子たちを想像してみる。いっせいにカメラマンの足元あたりを見つめる女の子たち。そこには彼女らを引きつけて止まないものが、たしかにあるのだ。この〈おんなのこたち〉を、元女の子の作者は静かに見守る。〈ややななめ下にあるもの〉の正体をすでに知っている元女の子は、やわらかいひらがなを使い、やさしい文体を使う。まるで〈いっしんに〉みつめるだけで、まだ「それ」の正体を知らない〈おんなのこたち〉を愛おしむかのように。

しらがあたまのおとことおんなのまちあわせどこにも区切りのない青い空

年輩の男女が待ち合わせをしている。〈しらがあたま〉というちょっと乱暴で親愛の情に溢れた呼び方がこの歌の「いのち」だと思う。いつか自分も〈しらがあたま〉になることに思い至った瞬間に、他者でしかなかった彼らが、ただの他者ではなくなる。先の〈おんなのこたち〉が通り過ぎた駅ならば、〈しらがあたま〉はこれから通る駅なのだ。そして私たちは自分の内部が数え切れないくらい多くの他者たちの集合であることに気がつく。さっきすれちがった自転車の少年も、スーパーのレジで出会ったおばあちゃんも、むかし読んだ小説の主人公も、大好きな詩を書く詩人も、死んでしまったひとも生きているひとも、ときどき涙が出るほど懐かしく思うのは、彼らが時空を超えて自分の内部に居るひとたちだからだ。〈区切りのない青い空〉の青が泣きたいほどきれいだ。

いつのまにみどり並木は気がついたわたしに恥ずかしいことばかり

駅ビルの案内嬢は目印となって尊い帽子を被る

『「私」と呼ばれるこの生体は、それまで経てきた「場所」や「時間」や「対象」をただ保管しているだけの貯蔵庫にすぎない』と、保坂和志は著書の中で言っている。〈みどり並木〉も〈尊い帽子〉も私の記憶の貯蔵庫に存在している。

本田瑞穂作品「真昼の月」鑑賞 ▼▼▼▼▼▼▼ 倉富洋子

見えてしまったものたち

エレベーターぽっかり浮かぶ連れだって真昼の月へむかうみたいだ

〈真昼の月〉……。それは、其処に確かに存在するのに、多くのひとにとっては見えないもの、或いは見ないふりをしているもの、だ。

この〈エレベーター〉は、駅ビルやデパートなどに多い、ガラス張りの透明なエレベーターだろう。外が見えなければ意識しなくてもよい高さを逐一突きつけられたまま、わたしたちは運ばれていくのだ。自分が意図するよりもずっと高いところ、〈真昼の月〉のある位置まで。

友だちとのおしゃべりに夢中になっていたり、ケータイのメールを打っていたり、ウォークマンを聴きながら自分の世界に沈んでいるひとたちは、〈真昼の月〉の存在に気づくことも怯えることもなく、ちゃんと目的のフロアまで行くことができるのだけれど、〈真昼の月〉が見えてしまうひとは、もうそのままそこまで行ってしまうほかないのだ。

見えないものが見えてしまうのは、ある種「選ばれたひと」なのだけど、「選ばれた」ことがしあわせだとは限らない。いや、むしろ、見えないものは見ないままの方がしあわせなのだと思う。映画「シックスセンス」の死者が見えてしまう男の子は、とても辛そうだったではないか。

だけど本田さんは、「見えてしまったものたち」を引き受ける覚悟があるようだ。〈真昼の月〉へと向かっていることを知りつつ、エレベーターから降りずにいるのだから。

ややななめ下にあるものいっしんにおんなのこたちみつめています

退屈なオトナの前では、〈おんなのこたち〉はみな申し合わせたかのように〈ややななめ下〉に視線を落とす。「現実に見えるものを拒絶して、見えるもの、見たいものだけを見ていくのだ」という強い意志表示のように。

また、女子だから助詞がいらないというわけではないだろうが、〈おんなのこたち〉の日常会話には、絶対的に助詞が欠落している。この歌も、おそらくは〈ややななめ下にあるもの（を）いっしんにおんなのこたち（が）みつめています〉なのだろうが、助詞を省いたことによって「誰が何を見ているのか」があいまいにされていて、すごく不思議な印象だ。〈下〉という漢字以外はすべて流れるようなかな書きで、それもまたあいまい感を加速させる効果を生みだしている。

そう、〈おんなのこ〉って、いろんな意味であいまいでふしぎないきものなのだ。見えるものと見たいものだけを見ている気楽で頑なな存在に見えて、その実、見えてしまったものまできちんと引き受けていたりして。つよそうでよわそうで、強さや弱さとは無関係な次元に住んでいたりするのだ。

丸山　進作品「気まぐれな関係」鑑賞　▼　なかはられいこ

線と分母の神隠し

目を見ると負けそう鼻の穴を見る
キムタクと同じ形の鼻の穴

丸山進さんは頭の先からしっぽ（しっぽ？）の先まで川柳作家である。吉本新喜劇的「泣き笑い人生」を描くのがうまい。この鼻の穴二句なんか、まさしく、川柳的ユーモアに満ちている。

点線の関係だからしかたない
つまらない物を分母に持ってくる

だけど、私の個人的な好みはこちらの二句。それぞれ〈点線〉、〈分母〉が読者の想像力を刺激する装置になっている。人と人との間には、直線の関係やジグザグの関係やあるいは、ぐるぐるのうずまきの関係なんかがありそう。〈点線の関係〉は直線よりも淡い関係なのだろう。そうすると夫婦でもなく（夫婦はジグザグのような気がする）親子でもなく（親子はやっぱ、うずまきでしょう）昔の恋人くらいかなあ。なにしろ点線はキリトリ線に使われるくらいだから。では、あの人と私の関係は点線かしら？　それとも螺旋かしら？　なんて考え始めると止まらなくなって楽しい。

〈分母〉の句も同じようにおもしろい。たとえば「日本」を分母に「アメリカ」を分子にしてみる。たぶん答えは大きい数字になる。逆に「アメリカ」を分母に「日本」を分子にしてみる。請け合ってもいいけど、答えは思いっきり小さい数字になるね（笑）。

大抵のことはバナナでケリが着く
悪いことすればと金魚つぶやいた

うーん。ナンセンスと言ってしまえばナンセンスなんだろうな、と思う。ただ、こういった路線（？）でいちばん重要な点は、「どうしてもここは〈バナナ〉だよね」と読者を納得させられるかどうかなんじゃないかと思う。「ブドウじゃいけないの？」と言われてしまってはダメなのだ。

〈金魚〉の句もそう。「金魚ってつぶやくか？」と言われてしまってはダメなのだ。いかに荒唐無稽なことを書こうが説得力があればＯＫだ。反対にいかにリアルなことを書こうが説得力がなければアウトだ。

説得力という点から言えば、

空き瓶を持ち上げ雌雄確かめる

この句はとてもおもしろいと思った。ひよこじゃないんだからさ（笑）。〈持ち上げ〉というところがとてもリアル。ビール瓶かなんかの底をじっと見ながら確認している丸山さんの姿がとても自然に想像できて笑ってしまった。いったいどこで見分けるのか、今度お会いしたときにはぜひともご教示願いたい。

丸山　進作品「気まぐれな関係」鑑賞　▼▼▼▼　倉富洋子

いいひと。

丸山さんが「いいひと」であることに異論のある人はそうはいないと思う。いや、実はご本人のことはよく存じあげないのだが、丸山作品を読む限り、その「いいひと」オーラには圧倒されるものがある。

大抵のことはバナナでケリが着く

「まあ、ここはひとつ、アレですから……」意味ありげに笑って、おもむろに懐から取り出す、手が切れるようなバナナ。または、「越後屋、お主もワルよのう」とほくそえむ、いかにも悪役顔のお代官様に差し出す饅頭の下に忍ばせた、黄金色に輝くバナナ……。

うーん、違うな。やはりこれはもめ事の最中ににこにこと差し出される、善意あふるるバナナなのだ。渡された方が一瞬で毒気を抜かれて、しかたなく皮をむいてぱくぱく食べるしかないバナナ。この句の言い切りは、奥さんのヒステリーも子どもたちの反抗期も上司の叱責も部下の反発も、すべてこのバナナテクで乗り切ってきた自信ゆえかもしれない。

あまりにも庶民的なお値段に、そのありがたみを忘れがちだけど、やわらかな香りと甘みを頬張ると、思わずほっと力が抜ける……。バナナって確かに癒し系フルーツ。この句の〈バナナ〉は動かないなあと思う。

空き瓶を持ち上げ雌雄確かめる

空き瓶に雌雄なんてあるのか、という疑問の次には、「確かめてどうする！」という疑問がわくのだけれど（笑）。さささやかなゲン担ぎみたいなものだろうか？　朝の駅で慌ただしく立ち飲みする牛乳や、晩酌であけたビールの瓶をそーっと持ち上げて、雌だったら「お♪」と思い、雄だとしても「まあ、これはこれで」と思う……。あーあ、ほらほら中味がこぼれて、ネクタイにシミができちゃったよ。

つまらない物を分母に持ってくる

とかいいつつ、さりげなく自分自身が〈分母〉の位置に陣取っているのだろう。分子たちをしっかり支える、頼りになる〈分母〉。「私ごときが」な謙遜と「オレでなくちゃね」な自負が入り混じった、味のある一句だと思う。

体毛の存在価値を考える

同じ〈体毛〉でも、鼻毛やわき毛はなんだか肩身が狭いのに対して、頭髪はさみしくなれば増毛だの養毛だのと大騒ぎである。おなじ〈体毛〉なのに、〈存在価値〉の違いで随分と冷遇されたり優遇されたりって、ヘンだよな。この句につられて、私までそんなことを大真面目に考えてしまった。

丸山さんの川柳の中では、世界はなんだか至極平和で、何よりもそのことにホッとしてしまうのだ。肩の力を抜いてみよう。ここらでちょっと一服しよう。そんな気分になれる。

峯　裕見子作品「五黄」鑑賞　▼▼▼▼▼　なかはられいこ

豆腐のきもち

峯裕見子作品十句にはそれぞれ違う味がある。しょうゆ味、塩味、マヨネーズ味、バーベキュー味。食いしん坊の私としては、いろんな味が楽しめてうれしい反面、ちょっと困ってしまった。〈目出し帽〉や〈カトちゃんの髭〉のように、意外なアイテムを使ってマンガチックな笑いを誘うものから、〈転生の果て〉や〈著莪の咲く谷〉のように、漢語を使ってほの暗い生死観を書いたものまで、その幅の広さに軽いとまどいを感じてしまったのだった。

借金で買った車に貼るお札

これは〈目出し帽〉や〈カトちゃんの髭〉につながる系譜の作品。すこし違うのは前の二句よりアイロニーが露出しているところ。

吊るされた肉ゆっくりと揺れており

こちらは〈転生の果て〉や〈著莪の咲く谷〉につながる系譜の作品。違うのは抽象的な用語が使われていないところ。そして写生の要素が強いところ。大きな鉄の鉤に吊されて揺れている牛肉の塊。去年のBSE関連のニュースでおなじみになった映像だ。あの肉の塊は揺れることで何かを伝えたがっているかのようだった。作者も肉も無言なのに〈ゆっくりと〉と書かれた瞬間に、作品が語り始めたような気がする。

許してくださいと豆腐から水が出る

十句中、いちばんこころ惹かれた作品。

モノを擬人化した作品は川柳ではけっして珍しくはない。だけど……。この句の〈豆腐〉は豆腐のままの姿でしゃべるのだ。これは私の知っている擬人化川柳（？）とはかなり違う。〈許してください〉と、水っぽく震える声で訴える豆腐。まるで川上弘美の作品世界のようだ。なぜ泣く、豆腐？　いったい何をしたんだ、豆腐？　私でよければ話を聞こうじゃないか。と、ついつい、水切りの途中で重しをどけて豆腐に語りかけてしまいそうになる自分が、ちょっと怖い。そして読み手をそこまでの気分にさせてしまう峯さんは、もっと怖い（笑）。

片方も赤を揺らして泣くらしい

ここでも泣いている。しかも泣いているものの正体がわからない。〈片方〉と言っているからにはセット物なのだろうか？　靴とか、手袋とか、ピアスとか、耳栓とか。ああでも〈赤を揺らして〉泣くんだ。なにもの？　実は私が〈片方〉〈赤〉から連想したものは「運命の赤い糸」だったりする。いまだ出会っていない恋人の片方が相手を恋うて泣いているのだ。合図のように糸を揺らしながら。うーん、だけどこの解釈は少し恥ずかしい。こういう作品は無理に解釈しようとしないで、イメージだけを受け取ればいいのかもしれない。

峯　裕見子作品「五黄」鑑賞　▼▼▼▼▼▼▼▼　倉富洋子

ちょっとだけよ。

今回の十句、峯さんの川柳作家としての守備範囲の広さを改めて思った。〈**借金で買った車に貼るお札**〉のように一から十まですべてが親切に書いてあるものから、〈**ここだけが少し湿って明るくて**〉のように余白に余韻を持たせたものまで、明暗や濃淡を取り混ぜた川柳のバリエーションを見せてくれた作品群である。

今日はいちにちカトちゃんの髭になる

この〈髭〉は、ドリフの加藤茶と志村けんの名コンビによるヒゲダンスのヒゲだ。カトちゃんに「宿題やったか？」「歯、磨けよ～」といわれないと一週間が終わらなかった子どもの頃を懐かしく思い出す。古きよき昭和。

モー娘。とCDまで出しちゃう志村けんに比べて、加藤茶の影は果てしなく薄い今世紀、〈カトちゃんの髭〉という言葉にはなにやら哀感が漂う。〈カトちゃんの髭〉は「昭和の笑い」であり、「過去の笑い」の象徴でもある。そんな髭になる〈今日〉〈いちにち〉。〈いちにち〉というかな書きもまた、この句にうっすらとした陰を与えている。

片方も赤を揺らして泣くらしい
ここだけが少し湿って明るくて

今回の作品群では、この二句につよく惹かれた。語りすぎていないところがいい。

〈片方も〉というからには、もう片方もまた、〈赤を揺らして泣く〉のだろう。状況を説明しろといわれるととても困るのだが、片方ともう片方（つまりは両方とも）が同じように〈赤を揺らして泣く〉というのは、ただならぬ悲嘆である。離れるべきでなかったものたちが離別を余儀なくされて、ふかくふかくかなしんでいる。幼く仲のよい一卵性双生児をまず思い浮かべたのだが、生者と死者でもいいし、花や風鈴などをイメージしてもいいのかもしれない。「泣いている」ではなく〈泣くらしい〉と、泣いている対象物が直接書き手の視野に入っていないため、べたべたした抒情性とは一線を画している点も、この句に惹かれる理由である。

二句目は〈ここだけが〉という限定なのだが、まず〈ここ〉がどんなところかがわからないと、〈少し湿って明るくて〉がどういう状況なのかうまく像を結ばない。なのに作者は、その情報を潔いほどにきっぱりと遮断しているのだ。

カトちゃんといえば、官能的な音楽にのって「ちょっとだけよ」と踊るギャグも人気だったけれど、カトちゃんがもし裸だったら、誰もあのギャグに見向きもしなかっただろう。「ちょっとだけ」の情報だから、ついついのぞきこんでしまうし、その先をいろいろと想像してしまう。そのことを熟知した作者の「ちょっとだけよ」な手法にまんまとはめられた私の読みは、妄想へと横滑りしていきそうでちょっとこわい。

ゲリラ的超ジャンル句会
Eの会☆句会レポートVOL.3＊兼題
ハラ・クラ　VS　俳人ヴァージョン

6月16日　午後1～5時　於・渋谷ルノアール会議室

▼参加者／植松大雄・遠藤治・岡田幸生・菊池典子・佐藤りえ・ていだきねこ・長嶋肩甲・三宅やよい・木綿（欠席投句&選）なかはられいこ・倉富洋子

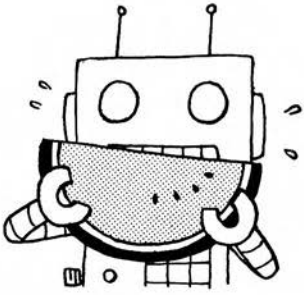
■兼題「砂」　出題／三宅やよい

長な三木倉岡佐
て植木
て
長菊木佐
菊遠植
長三遠佐
三菊な
遠な
菊木遠佐倉な
菊植
倉
長て岡遠植倉
岡遠
菊
三木て佐植な

長
長三植倉
て岡
岡
て
三岡な佐倉

うつくしき砂鉄あつまるからだかな　遠藤　治
そぼぬれて砂丘に眠る駱駝あり　菊池典子
黒南風に砂消しゴムのあとひとつ　植松大雄
砂日傘ひらいてもものしろいこと　岡田幸生
砂浜にメトロノームが鳴り止まぬ　佐藤りえ
思い出す頃には砂になっている　なかはられいこ
素数へと戻る　画面の砂嵐　倉富洋子
六月の男ばかりが砂まみれ　三宅やよい
朝涼や給仕の回す砂時計　ていだきねこ
白玉や諍ひ終はり乾く砂　木綿
小数点以下醒めた砂こぼれ　三宅やよい
砂でしょう泣いたりしたらだめでしょう　なかはられいこ
砂浜の冥き水にも雨のふる　菊池典子
砂浜となるまで抱く夏の雲　遠藤　治
冷蔵庫の奥で砂漠が冷えている　倉富洋子
犯罪や氷菓砂をかむきもち　木綿
惑星や朝は砂丘夜は天河　ていだきねこ
六月の砂の時計のくびれかな　岡田幸生
星砂買つて夏休み終はる　佐藤りえ
短夜に火星という名の砂時計　植松大雄
くっつかぬ砂が哀しい夏の果　長嶋肩甲
手の甲に砂をこぼしている曇り　長嶋肩甲

第三回Eの会は、ハラ・クラVS俳人ヴァージョン。「恒信風」より、植松大雄さん、遠藤治さん、ていだきねこさん、長嶋肩甲さん、木綿さん（当日急遽欠席となり、電話で選に参加）。「船団」から三宅やよいさん。自由律俳句「層雲」より岡田幸生さんと菊池典子さん。「恒信風オンライン句会」で活躍中の佐藤りえさんを招いての、俳句と川柳のバトルロイヤル句会となった。



Eの会の一回目と二回目にご出席いただいた村井康司さんは、今回ジャズコンサートご出演のため、「季語のことは肩甲さんに訊いて下さい」という言葉を残して欠席。季語のすべてを託された（？）長嶋さんを始め、ていださん、三宅さん、菊池さんが初参加。

まずは兼題「砂」のコメントから。

▼うつくしき砂鉄あつまるからだかな

な：きょうは眠いひとも眠くないひともお集まり頂きましてどうもありがとうございます。第三回Eの会を始めさせていただきます。

では、早速ですが本日の最高点からまいります。長嶋肩甲さん、お願いします。

長：えーはい、そうですね。後半の「砂鉄あつまる」というところが意外性で。砂鉄がうつくしいものであるという、言い切り、これはなんだろう。俳句と川柳が良い出合いをしたっていう……。

な：ハーフなんですね。

長：そうです。「うつくしき砂鉄」は俳句の側から出る発想かなっていう感じがします。

な：「うつくしき」は「砂鉄」にかかる？

長：僕は「うつくしき」は「砂鉄」にかかると思ってとりました。砂鉄がからだにあつまるっていう、なんか理屈ではない感じは川柳の良さとして捉えました。それらがバラバラになってないし、簡単な言葉をつなげてるところも良かったんじゃないかな。

な：はい、ありがとうございました。三宅さんいかがでしたでしょうか？

三：これはわりとサッととったんですけどね、ちょっ

とわからなかったのが、砂鉄があつまってからだの形ができるのか、もともとからだがあって砂鉄をあつめるのか。というのと、「うつくしき」が「砂鉄」にかかるのか「からだ」にかかるのか、読むのに迷ったんだけど。私としては「砂鉄」があつまって「からだ」の形になるというほうがいいなあという……。

な：からだがもともとあるんじゃなくて、砂鉄があつまってからだの形を作ってるっていうことね。

三：うん。で、これは紛らわしくない表現にするのは難しいからこれでいくしかないかなと思ってね、考えさせられました。

な：はい。岡田さんはどう読まれました？

岡：僕も「うつくしき」は「砂鉄」にかかるかなと思ったの。肉体に砂鉄があつまった、みたいに単純に読んでファンタジーなのかなと。あまり積極的にとったんじゃなくて、一番最後にとったんですけど（笑）。実は「うつくしき」って要らないんじゃないかと思ったの。その下で全部言えてるんじゃないかと。迷ったんですけど。川柳的なファンタジーなのかなと感じたのね。

な：川柳書きはふたりともとってるんですけどね（爆笑）。じゃあ、佐藤りえさんお願いします。

佐：「うつくしき」は「砂鉄」にかかってるんじゃないかと思って頂きました。というのは「うつくしき」が「からだ」にかかるとひじょうに生々しい感じがして好ましくないと。私は、もとからからだがあって、そこに砂鉄があつまってくるのかなと思ったんですけど。

三：「あつまる」の下に軽い切れがあるよね。

佐：うん、軽い切れがあるような感じがしました。「からだ」とか言ってしまうと生々しくなって、なんかマッチョ感があって嫌だなと（笑）。

な：マッチョ感！（爆笑）

佐：ただこの句はあんまり濃ゆくない気がして頂きました。

な：はい、倉富さんは？

倉：はい、私はこれは、中高生くらいの男の子の体毛が生え始めたところかなと……。

な：はい？　む、胸毛ですか！

全員：爆笑

倉：胸毛とかそういう濃いのではないですが（笑）。砂鉄っていうのが、なんだか若々しくて「発芽していく」って感じの体毛っぽくて。だから「うつくしい砂鉄があつまる、うつくしいからだ」と読みました。ちょうどうちの息子たちがそういう時期なので。

佐：あれは、内側から生えてくるものではなくて……（笑）。

倉：まばら感が、砂鉄っぽいかなと。

な：なるほど。まばら感ね。私も頂いてるんですけど、これは磁石をね、砂の中とかに入れると砂鉄がくっついてきますよね。幾何学的な模様であつまってくるでしょ。あの磁石をからだに置き換えてるのかなと思いました。「うつくしき」は「砂鉄」にも「からだ」にもかかるんじゃないかという感じがしたんですけど。この「砂鉄」だけが漢字であと平仮名ってところも、平仮名が全部「砂鉄」にあつまってるみたいな表記になっておもしろかったです。

倉：「からだ」が平仮名表記なので、生々しさってあまり感じなかったんだけど。

三：昔、下敷きの下で磁石動かしてやったよね。

な：方向性があるよね、砂鉄って。

倉：あのね、「うつきしき砂鉄」ってなにかの喩でないと、なんでからだに集まってくるのっていう不思議感が出るんですけど……。

な：なんでって……。

倉：みんな不思議じゃなかったのかなあ。

な：んー、なんでも喩として読んでしまうのがわからない。

佐：「砂鉄」は砂鉄そのものとして読んだので……。

倉：鉄人？

全員：爆笑

植：鉄では磁石であつまらないですから（笑）。そこがちょっと迷ったところだったんですけど。

な：遠藤さんはいかがでした？

遠：えとね、「あつまる」というのが理屈を感じさせてしまってるんじゃないかと思ったんですよね。

な：理屈ね。なるほど。じゃ、ていだきねこさん。

て：私は「うつくしい」が「からだ」にかかっちゃうとおもしろくないと思ったので、他の読みはできないかと考えたんですけど、できなくて。うつくしいからだとか言ってるのは嫌だなと思って。きょうの題の砂って、他の句も「ももが白い」とか「抱く」とか「くびれ」とかそういうものが多くて、砂浜、水着、女の体、みたいな……。

全員：爆笑

て：そういう嫌な感じがしたのでちょっと申し訳ないです。だから砂鉄っていうのをもっと読めばよかったんですけど、作者もなんか、砂浜に「ＪＡＬ沖縄」みたいに女が寝そべって砂が集まってて、砂鉄は適当につけたんじゃないかとか、自分がそういう浅い読みをしてしまって、それじゃあ嫌だと思ったんです。

植：砂鉄が男だとかそういうわけではないの？

倉：性別はどっち？　からだって。

な：私は性別ぜんぜん考えなかった。生身って感じがしなかったんだけど。

三：うん、中性っぽいよね。

倉：なんか女の人のからだには砂鉄は集まってこないような感じがして（笑）。
な：はいはい。菊池典子さんは？
菊：なんかよくわからなくて。砂鉄が内側にあるのか外側にあるのかとか、ちゃんと映像を結べないところがあって。魅力があるのは「砂鉄があつまる」なんだろうけど、ぼーっと見逃してしまいました。
な：はい、ありがとうございました。
長：さっきマッチョっていう言葉が出たけど、それは的はずれじゃないっていうかね。砂鉄があつまるっていうのは磁力で磁力は力だから、そこにマッチョとまではいかないんだけど、エネルギーを秘めてることをうっすらと感じさせるよね。
倉：それは男性ですよね。
長：いや女性もエネルギーあるから。「からだ」って言葉は賭けだったんだよね。
菊：でも「砂鉄」だけが漢字って気持ちいいですよね。
な：では作者のかた、名乗っていただきましょう。
遠：はい、遠藤です。
な：遠藤さん、やっぱり川柳においで（笑）。ハーフとか言われてるし。
長：最近ちょっと川柳がかってるぞ。
全員：爆笑

▼朝涼や給仕の回す砂時計

な：では、この句は菊池さんからお願いします。
菊：うん、単純にすごく気持ちよかったです。「給仕」っていう言葉もウエイターっていうより懐かしいし、朝に似合うなあって。
な：はい。じゃ佐藤りえちゃん。
佐：はい。すごく好きな光景が描かれていて。紅茶を頼んだときに砂が落ちきりましたらお飲みくださいっていう、あれが大好きなんですよ（笑）。あと言葉の選び方の美しさとか、無駄のない感じがしてきれいだと思いました。
な：遠藤さんお願いします。
遠：はい、どこにも紅茶だと書いてないのに、これは紅茶以外に有り得なくて。それに「朝涼や」という季語の斡旋がすごくうまいよなあと思いました。これは俳句ですよ（笑）。
全員：爆笑
な：はいはい（笑）。でも川柳作家ふたりとも選んでるんですけど（笑）。
遠：ほんとだ（笑）。
な：ということで、倉富さん。
倉：はい。ほんとにきれいな俳句だなと思いました。なんか高原のホテルのモーニングっていう感じがし

て。ちょっと深読みしちゃうと、砂時計って一回ひっくり返して、落ちきったらもう一回ひっくり返すことができるわけで、毎朝、延命治療を施されているみたいな光景も浮かびました。それもまた淡々と受け入れてる感じがして。

三：俳句で言えば、療養俳句的なニュアンス？？

全員：療養俳句！

倉：だから、単純に読めばホテルの朝ご飯の紅茶についてくる砂時計なんだけど、この砂時計は「命」という意味も含んでいるのかなあって思いました。

な：「砂時計」ってわりと川柳では「人生の残り時間」みたいな比喩に使われますよね（笑）。

長：ほー。

三：そこがねー。私なんか「砂時計」は「砂時計」で終わるじゃんねえ。

な：川柳ではそういう読み方ってのがついてくるの。

三：しんどくない？　それ。

な：しんどいよ。だから嫌いなんじゃん（笑）。

長：ああっ！

な：あはは。えと、私もいただいてるんですけど、とても爽やかで、サ行音が涼しげでとても効いてるし、漢字のバランスもいいなあって。あ、これは俳句だ。きれいだ。と思っていただきました。

えと、じゃ、とってない三宅さん。

三：さっき佐藤さんが紅茶って言ってたでしょ。そういう体験がなかったから、なんで砂時計を回すの？ってわからなくて、評価できなかっただけで（笑）。でもいま説明聞いたらいいなあと思えてきました。

な：はい。岡田さんは？

岡：ぼくも三宅さんと同じで、ぼくはあまり紅茶が好きじゃないし。

佐：エスプレッソだし（爆笑）。

三：そういう体験があるかないかで違うよね、たぶん。

岡：うん、だから言われたらよくわかるんだけど。遠藤さんも言われましたけど、有季定型のフレームにかっちり嵌ってる。で、そのフレームが強靭すぎてなんかそこから出て来れないような感じがしたんだけど。でもコメント聞いてたら、ああ、いいんだなあって思う。「回す」って言葉も効いてるかなあって。

な：はい。じゃあ、きねこさんどうでしょう。

て：えと、わたしは「回す」にひっかかった。あれ半回転じゃないですか。

植：数学的に言えばいろいろと……。

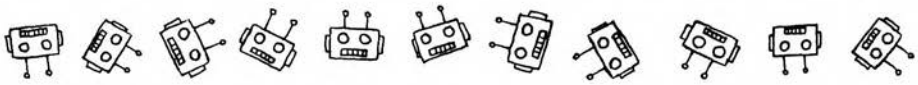
て：あと、俳句で終わらないみたいなものを読んでみたいなって思いがあって。「〜や」っていうのはきょうはとってないんです。

全員：爆笑

佐：「かな」とか「や」はとらん、みたいな（笑）。

て：いや、それは偶然なんですけど、結果的にそうなった。
な：はい、わかりました。えーと、長嶋さんは？
長：これは岡田さんがおっしゃったとおり、俳句としてできたもので、それこそ、こう褒められるだろうという褒め言葉まで浮かんでしまったほど良い句なんだけど……。で、僕は、その褒め言葉まで浮かぶ俳句の鉱脈を掘っていくひとは他にたくさんいるから、ていうんでとらなかったの。だってこれが良い句であることに間違いないから。さっき、なかはらさんが言ったサ行音の技巧とかね、かなりデリケートに配置してるし。句としての価値は認めるんだけど。この場において我々が掘っていく鉱脈ではないんじゃないかなと。
な：なるほどー。この場において我々が、ね。
長：でねえ、褒め言葉まで浮かぶのがほんとうに良い俳句なのかっていうのが自分でもわかんないの。それは読む側が俳句っていうシステムに慣れすぎてるせいで、この切れ字の使い方がこう巧いとか、この音韻の組み合わせがこう巧いとか、浮かぶ景色が爽やかとか、言ってないのに「紅茶」は浮かぶとか。
な：みんなが言ったことだよね。
長：そう。この出来から導き出される褒めはこうだろうっていうところまでが、俳句をやればやるほど見えてしまう。それって楽しめてないよね。だからその鉱脈じゃないんだよ、っていう気はするね。
な：はい、ありがとうございました。植松さんは？
植：はい。半分は光景が浮かばなかったのと、やっぱり型に嵌りすぎてるっていうか、教科書によくあるような。
な：ああ、見本というか、お手本っぽいってこと？
植：そうそう。
長：いやでもすごい巧い句だよね。
植：巧い句ですけど。
な：そうかー、これは正しい俳句だと思ったのね、わたし。はい、じゃ正しい俳句の作者は？
て：きねこです。
佐：おお！　すばらしい。
な：半回転とか言ってたのに（笑）。
長：でも巧いよ。これ句集を編むときは入れたい句だなあ。
菊：まったくなあ。でもひたすら気持ちよかったよ。

ゲリラ的超ジャンル句会
Eの会☆句会レポートVOL.3＊席題
ハラ・クラ　VS　俳人ヴァージョン



三倉
て三植菊
佐菊岡植な倉
長佐

長遠な倉
て植
遠

長な
長三植岡菊佐
三遠岡な
な

長佐倉て

て菊
佐倉
て遠植
三遠岡菊
岡

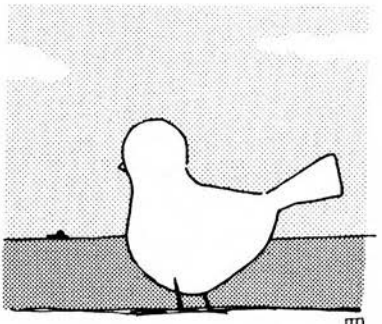
■席題「色しばり」　出題／菊池典子

笑ってるみんな黄いろく固まって　なかはられいこ
滴りやきみの帽子のあおい羽根　ていだきねこ
赤も青も鬼はともだち夏の雲　遠藤　治
黒鍵はかたくて嫌い夏の雨　長嶋肩甲
夏の川またげば銀にひかる魚　菊池典子
飴色のほたるの枝のはじかれる　岡田幸生
あかねさすをんなのうちの冷奴　三宅やよい
諸手あげ虹の色なす万国旗　佐藤りえ
夏の夜の菩薩の青い額かな　植松大雄
西日色のロンサムテディ・ベアかな　なかはられいこ
白線をたぐり寄せれば駆逐艦　倉富洋子
まだすこしねむいみずいろ抱きしめる　ていだきねこ
ひまはりやＲＦＦＧＦＦ　遠藤　治
青いのがつぎつぎ川に飛込めり　長嶋肩甲
マンドリルの鼻のあたりにぬるく風　倉富洋子
ハッキリとしろよウナギはウナギ色　岡田幸生
六月の鈍色の空だつたつけ　三宅やよい
国境は藍色の海南風(みなみ)来る　佐藤りえ
青々と桃をもぎたるあとの空　植松大雄
眠さうな目をした金魚金魚かな　佐藤りえ

休憩をはさんで、次は当日作句した席題の選&コメント。今回は、俳人の菊池典子さんに出題いただいた「～しばり」という川柳ではあまり使わないタイプの題に挑戦。

ぱっと目に浮かぶような色から、「いま」を感じさせる色（お忘れかもしれませんが、句会当時、日本はW杯一色。青といえば、それはすなわち日本代表の色なのでした）、思わず「それってどんな色やねん！」と関西弁でつっこみたくなるような色まで、とりどりの二十色の競演となりました。

誌面掲載は六点句二句のみですが、今回は席題の四点句までのコメントをウエブに掲載しております。こちらも合わせてお楽しみ下さいね。ＵＲＬは、55ページに掲載しています。



四

▼黒鍵は固くて嫌い夏の雨

な：席題も、兼題同様に高点句からスタートしますね。時間が押してますので選んだひと中心に訊いて行きます。作品やそれぞれの発言にどうしても「納得できん！」ということがあれば、自由に発言してもらって構いませんので（笑）。では、植松さんからお願いします。

植：好き嫌いがはっきり出たのがこの中で際だったんだのと、ジャズでしたっけ、サマータイムのイメージがあったので頂きました。

な：はい。ありがとうございました。岡田さんは？

岡：「固くて嫌い」っていうことろがすばらしいですね。

全員：爆笑（注：記録のための録音テープがオンになる前までは、実はネガティブ発言をしていた岡田さんであった）

植：だから遺言状はテープじゃなくて、紙じゃないとだめなんだよ。

な：公式発表みたいな、ね（笑）。

岡：でも（笑）、「黒鍵」はついとっちゃうんだけど、あまり積極的ではなかったです、はい。

な：はい、じゃあ菊池さん、お願いします。

菊：そうですね。急かされると駄々っ子みたいなのをついとってしまう、みたいなところがありまして（笑）。黒鍵の音が固いのが嫌なのかな、とか思って。そんな感じでとりました。

な：はい。それではりえちゃん、お願いします。

佐：言いがかりですよね、これ。

全員：爆笑

な：うん。言いがかりだよね、すごく理不尽。

佐：なんか恋人が言いがかりつけてるみたいな、そう読むとおもしろい。「固くて嫌い」は好みが別れるんじゃないかと思いつつ頂きました。

な：はい、倉富さんは？

倉：じゃあ、ピアノの鍵盤の白い部分がやわらかくて好きかっていうと、決してそういうわけではないと思うんですけど、なんかこう、言い切った不機嫌っぽいところと「夏の雨」がすんなり繋がっていて、いいなと思いました。

な：はい。えと、私も頂いてるんですが、黒鍵がかわいそう、と思って（笑）。この「嫌い」という強い言い切りと「夏の雨」がすっきりマッチしてていいなと思いました。黒鍵が固いっていう理由をいろいろ想像したんだけど、それで理屈になっちゃうと逆におもしろくなくなっちゃうので、この理不尽さをそのまま受け取りました。

佐：菊池さんの音が固いんじゃないかというのもおもしろいですよね。

な：黒鍵ってシャープだっけ？　フラット？

三：音階によってどっちもあるんちゃうかなあ。でも言われてみれば黒鍵って白鍵よりは固そうに見えるよね。

な：と言いながらとってない、三宅さん（笑）。

三：私はね「嫌い」「好き」は入れんとこ、と自分で思ってるんよね。ただね、これは直接的な言い方で成功してるんよね。ただちょっと嵌りすぎたっていうんかなあ。

な：そうだよね、っていう？

三：うん。でもすごく魅力的だよね。

な：はい。ありがとうございました。えーと作者は？

長：肩甲です。

な：固いのね、黒鍵。

長：たぶんね。色しばりで「黒」を書いたところを評価して欲しいな（笑）。

全員：爆笑

佐：でも黒白は直球だと思うよ、たぶん。

長：あ、そう？　そうかー。

倉：次、白だし（笑）。

長：あ、ほんとだ。黒白対決だ（笑）。

▼白線をたぐり寄せれば駆逐艦

な：はい、黒白対決の白です（笑）。じゃあ、黒の長嶋さん。

長：黒鍵と白線ではまちがいなく白線のほうが勝ってるね。これはすごい魅せられたんですけど。白線と言いつつ僕は紐のようなものを想像してたから。紐をたぐり寄せていった先にあるもので駆逐艦を持ってこられるっていうのに単純に驚いたし、それがキワモノでもなかったというのがね。やっぱ駆逐艦っていう言葉がいいんだよなあ。駆逐艦だったらたぐり寄せてこれそうなんだもん。軍艦とか空母クラスになってくると嘘だよっていうのがあるでしょ。そうは言っても駆逐艦もでかいんだけどね（笑）。

佐：でかいよ。たぐり寄せるのはそうとうな力が……（笑）。

長：でも、そもそも白線ってたぐり寄せられるのかなあ。そんなこと言ったら、じゃあ駆逐艦はたぐり寄せられるのかって話になるから……。

全員：爆笑

長：なるからー。だからね、駆逐艦はたぐり寄せられる感じがしたけど、白線はたぐり寄せるものとしてはどうかなとは思うんだけどね。でも、おもしろかったです。

な：はい。じゃ、りえちゃんお願いします。

佐：ぎりぎりのリアリティを保ってるような……。

長：リアリティ！

全員：爆笑

佐：いや。あのね、「これはないでしょ、これはキワモノ狙いでしょ」って言わせないようなところが……。

長：ようなところでのリアリティね。

佐：その瀬戸際の勝負にこの人は勝ってるんじゃないかな。私は勝ちを認めてあげたいという。

な：三宅さんは？

三：上手いよね。舞台映えがするというか。これ「駆逐艦」だから、するするたぐり寄せられそうだよね。軍艦だったら重すぎるから、駆逐艦がすごく上手い。まあハマってやろうと（笑）。

な：「やろう」ね（笑）。

三：わざとらしすぎないしね。

な：はい。植松さん、どうでしょう？

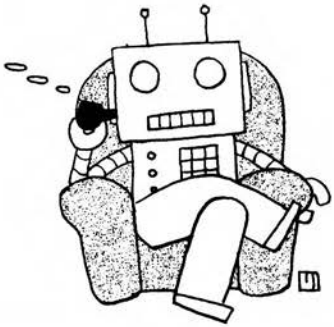
植：僕は夜店の、紐ひっぱるやつだと思ったんですけど。

佐：ああ。

な：それはリアリティだよね（笑）。

植：駆逐艦とかあせりながらも実は夜店のアレだったという。驚かせてオチもあるという、その良さで頂きました。

長：紐にプラモデルがついてるヤツ？
植：うん、それかなあと思って。
な：はい。岡田さん。
岡：黒鉄ヒロシでしたっけ？　そういうマンガを思い出したんですけど。やっぱり僕もハメられましたね。瞬間芸っていう感じがちょっとしないでもないかな。
全員：瞬間芸！
三：後から冷静になったら後悔したりしてね。「違うやろ！」とかね（笑）。
な：「しまった！」とか（笑）。はい、では菊池さん。
菊：私は道路の白線みたいなものを思い浮かべて。こっち側は安全みたいなイメージがあるんだけど、駆逐艦のすばしっこいようなイメージも重なって、やっぱりこれも駄々っ子みたいなところで選んでるって感じですね（笑）。実際どうなんですかね？　駆逐艦って。
長：いや、ほんとはすごくでかいはずだよ。
菊：それはそうなんだけど、機能とかどういうんですか？
長：軍艦を守る、護衛艦みたいな……。
な：キティホークを守って自衛隊から出ていったヤツでしょ。
菊：攻撃能力はあるんだよね。
長：うん、空母とか守るためにね。
佐：日本海で不審船をおっぱらったのもそうじゃなかったっけ？
な：はいはい。えーと、話はつきませんが（笑）、作者はなかはらでした。ありがとうございました。
菊：白線はなんなの？
な：道路の白線、プラットホームの白線、まあなんでもいいです（笑）。



第三回Ｅの会、兼題・席題ともに誌面での紹介はここまでですが、
どちらも補強版をウエブにて掲載中です。
こちらもぜひ忘れずにチェックしてね！

http://www.sweetswan.com/weare/45800360912/fukurotoji5.html

マラソンリーディング
2002レポート

進化のために

藤原龍一郎

二〇〇二年七月六日、浜離宮朝日ホールにおいて「マラソンリーディング2002」が開催された。出演者は四十組、有料入場者が三百人を超えるという詩歌朗読イベントとしては、画期的なものだった。

この試みは実は二回目で、昨年は四月二十七日に、築地のブディストホールで開催されている。今回は、その時よりも、出演者も入場者も増加し、演出面のくふうもふくめて、確実に内容面でも、進化していた。

もともと、この詩歌朗読の試みは、石井辰彦がニューヨークのポエトリーリーディングに範をとって、その著書『現代詩としての短歌』の中で、「詩歌は朗読されることで、表現として完成する」との主張を受けたかたちで始まったものといえる。

岡井隆がみずからのカルチャー講座を通じて、若い歌人を巻き込んで、積極的な朗読の実践をおこなったことが、大きな刺激となり、この「マラソンリーディング」という、今までの詩歌朗読とは異なったイベントとして結実したといって良いと思う。イベントの実現に向けて、プロデューサーの役割をはたしたのが、歌人の田中槐。彼女が会場の押えから、インターネットを中心にしたスタッフ出演者の募集と統括。そして、パブリシティー、金銭管理といった現実面まで、先頭にたって実行したことが「マラソンリーディング」の成立と成功の最大の要因と言うべきだろう。

今回の特筆点は短歌のみにとどまらず、俳句、川柳、現代詩と、詩歌の分野をオールラウンドにカバーする出演者を登場させたことだ。

基本的な持ち時間を一人五分として、シンプルなあるいはパフォーマンス性を積極的に打ち出した朗読が五時間三十分にわたっておこなわれた。まさに、出演者より観客の方がマラソンだったと思う。しかし、詩歌を愛する人達が、年に一度、朗読者になったり、聴衆になったり、スタッフになったりして、辛く苦しい時間をわかちあうことで、文学的抵抗力を養うというのは悪くないではないか。冗談めかしてはいるが、案外、そういうことも大切なのだとの気もする。

一回目の昨年は、とにかく朗読してみるという参加者が多かったので、良かれ悪しかれ、テ

キスト重視になっていたように思うが、今年はそのテキストを効果的に聴衆に伝えるためにはどういう付加価値をつければ良いか、というところまで、参加者の頭が回っていた。それがさまざまなパフォーマンスや演出として体現されたわけだ。これは、率直に言って、面白い方向へ進んだと思う。

私から見て、この朗読をきわだたせるための演出に成功していたのは、まずトップの東直子だった。一番目の出演者というのは、当然、イベントに対する観衆、聴衆の期待感を担わされてしまう。無難にこなすだけではすまない重責といえる。東直子は、自分がやらなければならないことを十分にわかっていた。

〈雨が降りそうでねとても降りそうであたしぼんやりしやがんでゐたの〉

この一首目を東直子は歌うように節をつけて読んだ。この最初の一声で、会場に緊張と緩和が同時に発生した。そして、聞く姿勢が定まった。十三首の短歌が朗読され、最後に彼女は舞台を歩き、走りながら、観客席に向けて、いくつものカラフルなフリスビーを投げた。意表を突かれた観客は湧き、舞台と客席の空気の融合が成立した。この状況ができあがれば、二番手以降の出演者は、波にさからわずに乗るように気をつけさえすれば良い。出演順を決めたプロデューサーの読みがはまった、というべきだろう。東直子がここで果たした役割は、このイベントの成功を約束してくれた。

短歌以外の作品、たとえば俳句や川柳を、どのように朗読するのか？というのは私にも興味深い問題だったが、村井康司も宮崎二健もそして「WE ARE！」のなかはられいこと倉富洋子の二人組も、それぞれの演出でクリアしてみせた。

村井康司はギター演奏のスキルで、観客の集中力を持続させつつ、寺山修司の『田園に死す』を彷彿とさせる「語り」と「俳句」のコラボレーションを成立させた。

宮崎二健は天狗仮面という得意のギミックで、会場から登場。おおいに観客を面白がらせた。手作りの長い長い管楽器を鳴らし、ステージ上で、自由律俳句を語りかけるように朗読した。私は実はこの俳句の部分をアドリブのセリフだと思い込んでしまったのだが、事前に提出されたテキストどおりだったので、二重に驚いた。つまり、宮崎二健の俳句は限りなく喋り言葉に接近しており、まさに朗読との融合が成立していたわけだ。

そして「WE ARE！」の川柳朗読。宮崎二健がまず視覚

的にお客をびっくりさせたのに対して、この二人は着メロしかもスーパーマリオブラザーズの電子音という聴覚的なツカミから入った。この演出は朗読という本編に対して、きわめて効果的な演出だった。

現在の日常の中で、場違いな着メロの電子音というのは、誰もが感覚的な反応を示すようになってしまっている。それをホール内で鳴らせば、いやおうなく、そこへ注目が集まる。そしてそれが、出演者だと気づく。ここに、やはり、緊張と緩和が生み出され、朗読者への期待感が無理なく生み出される。

今回はさまざまな楽器やBGMの使用があったが、最も効果をあげたのは、この着メロの電子音だったと思う。朗読イベントというのは、何より声が主役となるものなのだから、声以外の音を入れる場合は、その効果と必然性が計算されている必要がある。なかはら、倉富の二人は自分たちの声質の違いも含めて、十分にそれがわかっていた。

これに加えて、視覚的効果となる二人の衣装の白と黒という色彩のバランス。ケータイの画面を見ながらの前半の朗読。さらに、後半の朗読のための赤いバインダーと、客にどう見せ、どう聞かせるか、というイメージを二人がきちんと持っていることが伺えた。

朗読自体は二人が交互に自作を一句ずつ読んでゆくというシンプルなものだったが、川柳の短さが耳に心地よく、意味もきちんと伝わっていたと思う。もしかすると、川柳が大会の選句発表以外の場で、これほど真剣に聞かれたことは珍しいのではないだろうか。

「WE ARE!」の今回の試みは、ステージに上がって、観客に対して川柳を朗読することの意味を二人が完全に理解していること、そして、自分たちのパフォーマンスをもっとも効果的に他者に伝えるための方法論が緻密に構成されていたという二点において抜きんでていたと私は思う。テンポ良く動き、発声することで、スピード感を獲得し、聞き手を飽きさせないこと。実は人前で声を出す時に、シロウトが心を砕くべきなのは、ただ、この一点だけなのである。さいわい川柳には五七五のリズムが内臓されている。このリズム感覚は聞き手も共有している。発声さえ鮮明であれば、確実に伝わるのだ。その意味で、聴覚、視覚、聴覚という順で観客・聴衆に刺激を与えていった演出は完璧といっても良い。

詩歌朗読の進化へ向けて今回の「WE ARE!」の試行は優れた手本となるだろう。

以下、私が今回、興味深く思った朗読に関して、少し感想を述べてみたい。

まず五人のユニットのEsパラディウムとして出演した江田浩司、天草季紅、山田消児、北久保まりこ、加藤英彦。衣装を付け、小道具を持ってキャラクターに成り代わる芝居的な朗読であり、一九七〇年代のアンダーグラウンド・カルチャーの匂いを、巧みに二十一世紀の空間によみがえらせてみせた。時間が逆行、あるいは凍結したような言葉の響きは、特に異様なアクセントを駆使してみせた天草季紅と奇妙な楽器の擦過音を合いの手にした朗読の北久保まりこにおいて顕著であり、全体の時間のバランスを再考してくれれば、さらに深く、観客にアピールできただろうと思った。

演歌をBGMにした一種の当て振りを見せながら、自作を朗読をした小川優子も、宮崎二健と同じく、フリークとしてのきわだちを見せてくれた。つまり、自分の作品を聞かせるのに、もっともふさわしい設定として、このヘルスセンターまがいの通俗性を選択した意志は、そのまま表現の根拠に通底するということなのだ。聞かせるために、衣装を着け、演歌を流し、踊るという方法論は正しい。

完成度が高かったのは田中槐だった。いくつもの鉦に似た打楽器と声とのバランスが良くとれていたし、リフレインの「私は耳だ」という部分がきわめて印象的に聞き手の頭に残る。これは朗読という表現のイメージがしっかり把握できているということだろう。たとえば、この打楽器奏者とのユニットであれば、福島泰樹のような単独ライブをおこなえる可能性さえあるのではないかと思う。昨年の作品「Merry・Go・Round」も、この奏者との拮抗を計ることで、さらに鮮烈さを増すのではないか。プロデューサーとしてのエネルギッシュな活動をしつつ、演者としての方法論を進化させていることには敬服する。来年は、せめて司会だけでも、別の人に譲って、パワーを朗読だけに集中できるようにしてほしい。

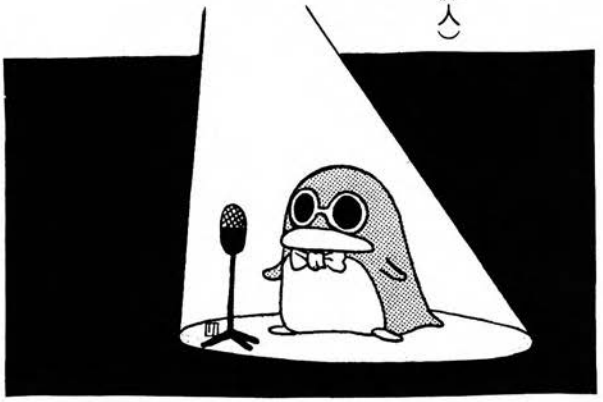
朗読のためのテキストの構成ということでは、錦見映理子のサン・テグジュペリの「南方郵便機」の一節と自作の短歌とのコラボレーションが印象に残った。テキストの充実は、表現者としての基本であり良心である。

今後の詩歌朗読の課題としてとにかく聞かせるためのくふうを凝らすことだ。たとえばボイスパーカッションやホーメイがとりいれられれば、さらに表現の領域は広がるだろう。とにかく、やってみることなのだ。

マラソンリーディング２００２☆翌日座談会☆

朗読という文化 朗読というメディア

▼出席者
荻原裕幸（歌人）
菊池典子（俳人）
佐藤りえ（歌人・俳人）
田中庸介（詩人）
藤原龍一郎（歌人）
村上きわみ（歌人）
倉富洋子
なかはられいこ



マラソンリーディング翌朝９時より、銀座の某所で座談会を開催。それぞれがマラソンリーディング参加者、スタッフ、観客の立場から、短詩文芸の「朗読」の流れや考えを語りあった。

本誌掲載は、川柳に話題を絞ったごく一部だが、前回同様にウエブで全発言を公開。３時間に及ぶ討論は、

・それは、現代詩からはじまった
・短歌に於ける朗読ムーブメント
・演劇界でも朗読はしずかなブーム
・自作を読む・他作家の作品を読む
・スタッフサイドから
・「批評」が世界を動かすのだ！　など。

全発言掲載のウエブアドレスは
http://www.sweetswan.com/weare/458003609l2/fukurotoji5.html

川柳の朗読、今回の「WE ARE!」の朗読

荻原：昨日開催されたマラソン・リーディングに出演、もしくは出席した皆さんに集まってもらいました。超ジャンルの誌面づくりをしている「WE ARE!」

の座談会として、できるだけ広い視野から、詩歌の朗読について意見交換できればと思っています。

（中略）

荻：なかはらさん、川柳を朗読してみてどうだった？

な：あ、はい。まず最初に、私がこの点だけは大事にしようと思ったのは、作品を書き上げた瞬間を再現するっていうか、もう一度作品が出来上がった瞬間に自分を戻して読もう、ということを一番強く思ったんですね。私は作品をぜんぶダイアローグのつもりで書いてるんです。外に向かって言いたいことを書いているつもりなので、他のことはあまり考えずに、伝えたいという気持ちだけで読みました。昨日は伝わったんじゃないかという手応えみたいなものはありましたね。

荻：短歌や詩の朗読と比べて、川柳の朗読はどうでしたか？

な：やる前は不安だったんですよね。川柳と朗読というのが自分の中ではうまく結びつかなくて。ただ、発信者それぞれに考え方が違うので良いとか悪いとかは言えないんだけど、もう少し余分なものが無くてもいいんじゃないかとは思いました。いろんな装飾を外したテキストそのものをもっと聴きたかったというのはありますけれど。すごい当たり前のことなんだけど、テキストの力っていうのを書き手が、書き手と発信者とは同じわけですけれど、もっと信じてあげてもいいんじゃないかなっていう気は少ししました。

藤：ちょっといいですか？　演出としてね、携帯電話の音を聞かせながら入ってくるというのがあったじゃないですか。そういう最低限の演出も必要だと考えたのはどういう？

な：それはすべて倉富さんが考えたんですが、携帯電話から始まるという演出については、川柳はもともと生活の中から出てくる詩なので、都市生活者として見慣れた普通の光景から始めよう、みたいな狙いがありました。

倉：それに、ケータイのメール画面にテキストを入れて読むっていうのは、短歌じゃできないだろうと思って（笑）。

な：川柳は短いからね、短歌じゃメールにテキスト入らないでしょっていう、ね。

荻：そうだったのか（笑）。

倉：最近では、劇場で芝居の上演中に着メロが鳴ることがやっと減ってきたんですけど、それだけに鳴るとみんな「誰だよっ！」って一瞬苛立つんです。そのすきまから入っていこうかな、と思って。加藤治郎さんが昨日「着メロが聞こえた瞬間、あ～あ、誰なんだよ」って思ったって言ってくださったんですけど……。

な：うん、不謹慎なヤツが居ると思ったってね。

倉：そう、あれを聞いたとき、とりあえず着メロを出

のBGMにしたのは正解だったと思いました。みなさんから川柳の朗読って何するの？　って随分訊かれて、逆に「何を求められてるんだろう」って不安だったんですけど、川柳は私たち一組だけだったので、朗読中はテキストをきちんと読むことに徹しようと思ったんです。でも、そのための「つかみ」が必要だから、いろいろ考えて、「じゃあ、着メロだ」って。あと、二人で朗読する場合の必然性って一体なんだろうと考えたとき、掛け合い以外は思いつかなくて。最初に読んだテキストは、50音のアクロスティックになっているんですけど、朗読の時点ではたぶん伝わらないだろうから、作品を書いた小さなメモを用意したんです。裏には「あ」「い」など、作品の頭の一文字を書き抜き、アクロスティックになっていることがわかるような、解題的メモ。これをビニールの小袋に入れ、キャンディとともに客席に投げる予定だったんですけど、届かなかったの、ぜんぜん（笑）。

な：袋に入ってるから空気抵抗が大きくて飛ばないんだよね。客席の2メートルぐらい手前にポトッと落ちて悲しいの。

藤：リハではやったんだけど止めたんですよね。

倉：はい。いらないもの、ミスしそうなものは全部リハの段階で削り落としました。個人的な練習は勿論しましたが、ふたりではほとんどあわせなかったし。本番当日も、結局一度も合わせなかったよね。

な：しようか、いや、止めとこ、ってね（笑）。

荻：時間の関係で練習ができなかったから排除したというのはまずいことなのかもしれないけど、実際にはテキストの伝達を阻害する可能性をぜんぶ落としたということですね。

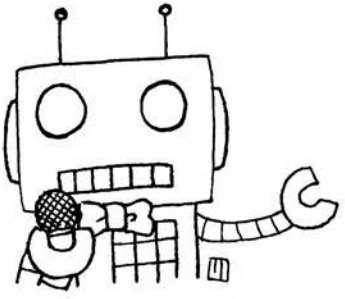
倉：不安になるとどうしても過剰なことをしてしまいがちだし、過剰になると本質が見えにくくなるので、不安にならないことを第一に考えました。あとは、当日会場を見て、いくつか予定を変更しました。本当はステージの上手下手から出るはずだったんですけど、実際にステージを見たらすれ違うっていうのがよく見えないような気がしたから、じゃあ客席から出ようとか、出のタイミングがずれないように、出やすい位置に隣同士に座ろうとか。ただ、ふたつ前の松井さんと杉山さんが一つの詩を交互に切って読んでたので、なかはらさんのビルの句の読み方にかぶっちゃうよ、まずいよ、と慌てたんですけど……。

な：「読み方、変えようか」って言うから「いやだ！変えない！」って。そんな直前で変えられたら困る（笑）。

田：なかはらさんのビルの句は別にして、他はお二人ともご自身の作品をお読みになったんですか？

倉：はい。あとは全部自作です。

荻：過剰なものをつけないって大事ですね。石井辰彦さんとか、岡井隆さんの朗読した作品は、すでにテキストの時点で演出がかかってるんですよね。詞書きが付いてるわけです。あの演出に対してさらに何か朗読上の演出をかけたら、過剰になって見えないものが出てくると思うんですよ。だから一番シンプルな形で朗読してるわけでしょう。あの方法はおさまりのいい方法だと思います。朗読ってことそれ自体が、詞書きに相当するぐらい重みのある方法なので、二重に方法、演出がかかると伝わりにくくなるでしょうね。



藤：今のね、演出のことを聞いたら僕はすごく成功してると思うんです。というのは基本的にはね、たとえば今の石井辰彦、岡井隆というようなひとに対する名前がすでにあるひとの存在感と、無名なひとの存在感というのは、やっぱり無名であるが故にそこでまず、キャッチしないといけないというのがありますよね。このひとたちは何なんだと思わせて、とりあえずステージの自分たちに注目させないといけない。そこからテキストが始まる。僕はリハーサルから全部立ち会ったんですけど、「WE ARE!」は一番シンプルに客席をキャッチするのに成功した演出だったと僕は思ったんです。ああ、そうか簡単にできるんだと。今、倉富さんのお話を聞いて実に理路整然としてるし、ああ、成功したんだなと思ったんですけどね。

荻：お客さんのキャッチは必要なんだけど、キャッチを狙いすぎて、テキストから離れてくっていう人もいましたね。方法としては良いと思うんだけども、結果としてそうなった人が。すごいインパクトがあって、吸い込まれていったんだけど、あの人が読んだテキストなんだったかなっていう印象の人もいました。

藤：だからね、きのうのような大会場でやるときと、カルチャーセンターとかで岡井さんたちが試行しているような形でやるときと、ぜんぜん違う方法論が必要だと僕は思いますね。カルチャーセンターでやるときはね、この人が講師であるという形でみんなの視線がそっちに向くから。

荻：あらかじめ、たとえば藤原さんなら藤原さんの名前を出して人に来てもらうイベントだったら、その人は藤原龍一郎の朗読を聴きにきているわけですが、マラソン・リーディングに来るっていう人たちは、必ずしも個々に全員の朗読を聴きに来ているわけじゃなく

て、全体を聴きにきてるんですよね。だからまず一度こっちを向いてもらわなくちゃいけない。それで演出が過剰になってしまう……。

藤：そう、だからごく一部の人を除いて無名性の中から立ち上がらなくちゃいけないわけですから、まずそれをキャッチするところからでないとテキストに引きずり込めないっていう、まず最初のハードルがあるんで。それをみなさんがどうクリアするかっていう問題なんですね。

近くて遠い？ 川柳大会披講と朗読

田：菊池さん、自由律俳句の場合、句会では作品を読み上げないんですか？

菊：読み上げますね。

田：それは非常に小規模な朗読だと思いますけれど。

菊：そのとき手元にはテキストはあるんです。

田：でも読み上げる句会っていう場があるだけでもわれわれにとっては驚きなんですけど。

な：川柳の句会というのはね、披講という形式があるんですよ。手元にテキストは無いんです。自分の作品は覚えてますから読まれたときにわかるけれども、他の人の作品はその大会の結果が活字になるまで耳で聴くしかないわけ。

藤：だから昨日、今日やった大会は声でしかないわけですね。

村：その日の帰りにテキストは？

な：無いです。

田：じゃあ朗読会っていうのはすでに立ち上がってるんじゃないですか（笑）。

な：形としては存在してるんですが、みんなあれを朗読として聴いてないですから。

荻：それをどういう形でエッセンスなり全体なりを組み立てて別のものに転換させるかというところを考えないともちろんできないよ。

な：うん、そうですね。話は飛びますが、正岡豊さんたちが前にされた「スワンソング」と「クリスマスの鏡」。あの朗読テープを聴いてみようと思ったのも、もともと川柳では披講という形があるのに、一度も別の形で根付いてこなかったのはどういうことなのか知りたいというのもあったんですよね。

倉：川柳は披講をやってるから朗読には適してるはずだって言ったら、荻原さんから「披講はだめだ」って言われたことがありますね。

荻：はいはい。

な：披講特有の「型」があって川柳の匂いがするって。

荻：それが、川柳作家の二人が自発的に朗読をやろうとは感じなかった理由だと思うんですけど。披講をものすごく美しいと感じていて気持ちが良いものだったら、それは独立して動いていく可能性があるわけなんだけど、何かが邪魔をしてるわけじゃない。田中さんが言ったけど「すでにそこに朗読会があるじゃないですか」って言ってるのにそれが朗読会として独立していかないということは、何かの形でそれが邪魔されてるのじゃないかな。

田：だけど、なんでそこで独立させなきゃいけないのか。伝統のなかにすでにそういうことがあるんだったらから、実際問題として耳で聞く場は間に合ってるんでしょう？

荻：そうは感じなかったけどね（笑）。なんでかと言うと披講の中でもね耳で聴く川柳というイメージを持つものと、そうじゃなくて、ぼくには「なんだこりゃ」という印象を持ったものがあって、たとえばね、良い方は名前を出してもいいんだけど石田柊馬さんの披講っていうのは、耳で聴く川柳だと思ったの。披講することをあきらかに意識して選をしてるとしか思えないような作品を選んでるんだよね。あ、これは朗読会だと思った。そういうものは朗読だけど、みんな結局、目で見て選んだものを声にしてるもんだから、それは大会本来の道筋としては正しいんだけど、朗読会にはなってなかった。

な：要するに川柳ってものが、もともと外に向かって声を発するものだって意識が無い人が選者になったりすると、小難しい言葉が使ってあったりとか。

荻：いや、そっちはいいんだけどさ、ぼくが批判的に言ってたのは、自分勝手な感情をこめてさ……。

な：気持ちよさげに節つけてするやつ？　それは最低のものを聴きすぎ（笑）。

藤：節がつくんですか？

な：藤原さん、呼名っていうのを体験されましたよね。ああいう感じで披講される人が居るんです。

藤：ああ、独特の節がありましたね。

倉：どんなテキストもすべてそのパターンで読んでしまう。全部唸ってしまうみたいな方がいらっしゃいますね。

な：だからそれは、その選者特有のフィルターがかかった状態で聴かされるから、ちょっと……。

荻：だから、披講はちょっとねっていう話をしてたのはそのへんなんだけど。

倉：うん、確かに、荻原さんに指摘された時、「型」ってあるなあと思いました。

田：たとえばその披講っていうシステムの中から、自分の新しい形に改善していくのはどうでしょう。

荻：それはできると思うし、石田柊馬さんはおそらく

それをやってると思うんだけど、だけどそうなってくると今度は選をするときに、みんなが耳で聴いて快いものを選ぶっていう、変な展開になるし……。

全員：爆笑

荻：でも石田さんはこれが大会だっていう信念でやってたんで、そこはうまくいってましたね。

な：柊馬さんの場合は作品を生かしてあげようっていう意識がすごく強いのね。そうじゃない、ちょっとねっていう人の場合は自分を生かそうとするの。だから作品に対する愛情がある人の読み方っていうのは耳で聴いててすごく心地よいんだけど、自分に対する愛情のほうが強い人のは、ちょっとね。

荻：大会での選には、良い作品っていうだけじゃなくて、そこの大会だからとられるっていうものがあるってことを石田さんが言ってて、ある種のお付き合いであるとまで言ってて、じゃあこの人文芸じゃなくて何をやってるのかと思ったんだけど、実際に石田さんの選んだ作品の披講を聴いてたら、あきらかにこれはこの場所にいちばん合ったものを選んで、それを耳で聴かせてるんだというのがわかった。この人はメディアとして大会を意識してるんだと思ったの。他の人にはそれを感じたことがない。石田柊馬さんだけはそうした大会の場が見えていたんでしょう。だから石田さんが大会のことを肯定するのはいいなって思ったんだよね。他の人は大会に出てるんだけど大会を批判的に言うの。なかはらさんも自分が大会に出てるのに批判的に言うわけ。改善策を考えろよって思うんだけど（笑）。石田さんの場合はそれはマイナス面もあるんだけどって言いながら、自分自身でそれに対する答えを出してるんですね。それと、俳句の朗読のこともちょっと話したかったんだけど、個性の強い人ばかりが朗読してますね（笑）。

な：川柳と俳句の差異がついたでしょ。

荻：だからね、あれではついたことにならないよ（笑）。あまりにも出演者が特別すぎて（笑）。川柳と俳句がどこで交わっていて、どこで離れてるかっていうのが、もしかしたら朗読すると何か見えてくるんじゃないかと思ってたんだけど。

田：俳句は披講はあるんですか？

藤：披講、あります。あるけど節はつかないよねえ。

俳句は機械的に読みますね。

荻：俳句で節がつかないのは、俳句のほうが文字というか語の持ってる機能がものすごくはっきりしてるからじゃないかな。川柳の言葉に比べて。川柳の場合、語に感情をこめないと共感できないというか、共有できない部分が多くあるので、感情移入しちゃう読み方になりがち。俳句の場合は「や」とか「かな」とか「けり」って言えば、それは絶対的なものだから。仮に下

手な人が朗読しても、そこはもう語として機能してるので、節がつかないんじゃないかな。

藤：俳句の大きな大会って先生が先生自身で披講するんでしたっけ？　披講者が別にいるんじゃないの？

荻：披講者がいるケースもあるし、先生がやることもありますよね。先生が披講する方がやはりウケが良いみたい。

藤：互選句会だと披講者が一人出てやりますよね。

音声化することでうたわることば

荻：佐藤さん、俳句の朗読って動いてる？

佐：朗読の会ですか？　私は特殊なものしか知らないんですけど、サムライの俳ラとか。

菊：高田馬場かなんかでやってたポエトリーリーディングに行ったときにね、これは最初から聴くのを前提として書かれているテキストだなあっていうのは、上手いひとはよくわかるわけですよ。聴いてて次の言葉が衝撃になるように作られてるの。テキストを読めないから耳で聴くしかないわけでしょ。そうすると予測ができないわけですよ。目で読んでると次の行が見えてるでしょ。でも耳で聴くときにはまったく新たなものがぶつかってくるという楽しみみたいなものが増幅されてるような、そういう読み方だったんですよ。で、ああこれはおもしろいなと思って聴いてたことがあるから、あるいはラップ調で読んでいったりとか、それぞれおもしろかったから、そのときに自由律俳句でこういう楽しみ方ができるかなあって思いました。

荻：自由律に関しては作り手がこう言ってるんだから、なんとも周囲からは言えないかなあ……。

倉：私たちも朗読って言われたときに、「川柳って朗読できない」って思ったんです。なかはらさんは平仮名の作品がとても多いし、私は漢字の作品が多い。文字化する際に注意を払った表記のニュアンスを、どう音声化していこうかっていう課題があったし……。でも、朗読してみると意外にそうした部分はあっさりクリアできた気がするので、自由律ももしかしたら思っているよりも読んでしまったほうが伝わっていくのかもしれないですね。

荻：ただ、きのう倉富さんたちの朗読を聴いていて、全部が同じようには読めていなかったですね。途中でテンションが変わっていたよ。すごくいいなと思ったのと、大会での披講聴いてるのとあまり変わらないなあと思ったときがあった。川柳と俳句はさ、バーサスにして朗読会をやるといいかもしれないね。新しい視点というものが出てくるんじゃない？　川柳と俳句の間にあるものが何かとか。

藤：あの、自由律俳句がね、かなり朗読に向くんじゃないかっていうのは、比較的意味がとりやすいってのがありますね、耳で聴いたときにね。入江一月さんかな『しゅらしゅしゅしゅ』っていう句集を読んで、これができるんじゃないかと僕は思ったの。他人の作品でこれを読むことができるんじゃないかと思ってちょっと準備してたことがあったの。っていうことはね、たぶんできるんですよ。特に自由律の場合って、たとえば山頭火がマスコミ的にすごく流布して、みなさんの中に浸透したのは70年代に永六輔がラジオで紹介したからであって、それは意味がとれるからで。「うしろ姿のしぐれていくか」とかね。しかも覚えられますよね。みなさんの作っているものは系統が少しちがうにしても、いちばん突き刺さりやすいんじゃないかと思う。聴き手に対してものを残すことができるんじゃないかという気がするんですけど。で、ちょっと変わった形で去年サムライでやった宮崎二健さんの「俳ラ」っていうイベントを聴きに行ったんですけど、ギネマさんっていう人が、いわゆる自由律俳句だと思うんですけど〈**思うようにカンロ飴も買えない**〉っていうのがあって、これって筋的には断片ですよね。でも僕は一回聴いただけですごい残ってて、これはギネマさんの寝たきりのお母さんがアルツハイマーになったときに、言ったうわごとだということだったんだけど。そのフレーズって残るわけなんですよ、一年経っても。人間の精神状態ってもしかするとそういうふうになることがあるかもしれない。表面に書かれていること以上に自分の中に残っちゃうなっていう感じのことがあって。

田：詩人の鈴木志郎康さんが前に「嵌め度」という概念を提唱していたんだけど、詩って、わけもわからず頭の中でぐるぐると反芻してしまうのが気持ちのよいこともありますね。

な：たとえばね、カンロ飴の句にしてもそうなんですけど、テキストでそう書いてあっても何かの断片かなって思って読み過ぎてしまうものでも、声に出して言われると「え？　なにそれ？」って思うのはありますよね。

藤：そのときはテキストなかったんで、完全に言葉だけで残ったんですけどね。

荻：さっきの短歌の朗読の流れで、正岡豊さんたちの話をしていなかったんだけど、１９８０年代の半ばから後半にかけて、何度か、正岡さんたちの朗読へのトライアルがありましたね。学生短歌会のシンポジウムを87年に中京大学で開催して、そのとき加藤治郎も朗読をしてた。加藤さんの朗読すごく良かったんだよ。きのうの朗読に比べても、どこかその時の方がぼくには良かったかな。

倉：きのうとはなにが違うんですか？
藤：もっと痩せてたとか……。
全員：爆笑
荻：何が違うんだろう。叫んでた。勢いもあったし、自分は口語短歌、ライトバースの旗手なんだっていう自信もあったのかなあ。なんだろ、怖いものがなかったんじゃない。
な：え、じゃいま怖いものがあるの？
荻：あると思うよ。いまの朗読には。いまが悪いとかそういう話じゃないんだけど、その時、加藤治郎の朗読聴いて、「あっ！」と思って、ぼくは、それから加藤さんの作品が深く読めるようになったの。それまでももちろん多くの歌は読めてたんだけど、一部の歌はわからなかった。わからない歌っていうのは彼が連作に出てくるもので、この歌ってどう読んでも良くないよなって感じるものだったの。**〈レッドライト、グリーンライト、ゆらゆらとまわっているぜ素敵じゃないか〉**って文字で見ると、「え？　なにこれ？」って思ってたから。それが加藤治郎の声で叫ばれてるのを聴いた瞬間に、「あ、これ、わかった」っていうのがあった。それから『サニーサイドアップ』を全部読み直して、やっと「この歌集ぜんぶわかった」って思えた。
藤：それがムーブメントにならなかったのは？
荻：やはり受け入れ側の母体がなかったのかなあ。口語的な文体の短歌がまだ認知されきってなかったわけだから。そもそも短歌に口語が浸透しはじめたから、朗読がしやすくなった面もあると思うんです。母体が生じたところで朗読がはじまったら、あっと言う間にムーブメントになりましたね。
藤：それはいま、なかはらさんたちが言ってますね。そのジャンルの中に母体がないって。
荻：正岡さんには、これからもディープに朗読にかかわってほしいですね。90年代の終わりからのムーブメントではなく、それが、実は80年代に準備されたものだったという「歴史」のある場所から朗読できるのは、たぶん彼しかいないんじゃないかな。
「かばん」が朗読会を企画したとき、正岡さんも参加して、でも、なんとなくノリきれてないような、「何かちがう」ってずーっと思っていたみたいなところがあったけど、だからこそ「歴史」を示してほしいと思います。
藤：山崎郁子、正岡豊でやった朗読テープがさっきの「スワンソング」「クリスマスの鏡」なんです

けど、それは非常に完成度を追求したものですね。

な：ほとんどプロですよね。

荻：あの完成度は、現在の朗読のムーブメントが、本物になれるかどうかの、一つの指標としてあるかも知れないですね。

ハラ・クラ、朗読に関する抱負など

倉：あのー、時間も時間ですので、そろそろまとめにはいっていただいていいでしょうか？

荻：はい。「ＷＥ　ＡＲＥ！」の二人には今後も朗読の活動を展開してもらいたいので、これからの抱負を語ってもらえれば。

倉：んーと。「今後の朗読の活動展開」については、いまのところわたし個人としては全くの白紙です。自分にとって「自作を朗読すること」の意味が、まだうまくつかみきれなくて。

荻：さっきの川柳バーサス俳句っていうのはどう？

倉：おもしろいとは思うんですけど、誰が集まるかなあって、ふと考えると……（笑）。

荻：それは後で心配すればいいのでは……。

倉：確かに、俳句と川柳の差別化をはかるために朗読、というのはおもしろいと思います。マラソンリーディング・俳句組の宮崎二健さん、村井康司さんと、川柳組の「ＷＥ　ＡＲＥ！」だけで、俳句と川柳を区別してもらおうというのはあまりに無謀なので（笑）、いろんな人たちが朗読をしていくということには意義があると思います。

田：なかはらさんは朗読の初舞台はいかがでしたか？

な：私は最初、七七が付いてないと苦しいんじゃないかとすごく心配だったんですけど……。

荻：歌人みたいだね（笑）。

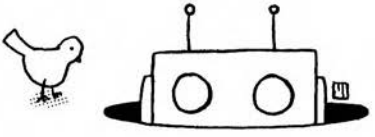
全員：爆笑

な：いや、だからそうじゃなくて（笑）。短歌はもともと歌でしょう。で、歌っていうのは声に出されるためにあるわけですよね。これは私見ですが、川柳が七七を切り捨てているのは、抒情の部分を切り捨てているんじゃないかと思うのね。自分の内に入り込むのを拒否してるというか。だから歌ってはいけないんじゃないかと、そう思ったんですよね。ただ読んでみて「川柳ってけっこう朗読、合うじゃん」っていうのは実感としてあります。

荻：「合う」っていうのは自分が気持ちよかったっていう意味？

な：伝えたいという意図は通じたかなと。そういう意味では気持ちよかったですね。ちゃんと伝わるように

読めるんだというのは思いました。
荻：可能性としてははっきり掴めてるんだね。
な：手応えはありましたね。
荻：倉富さんはどうですか？
倉：マラリー、川柳組初参加ってこともあって、みなさんから好意的なご感想をたくさんいただいたんですけど、あれは二人の声の質の違いとか、かけあいのテンポがよかったとか、テキストに幅を持たせることができたとか、そういう部分の成功に対する評価ですよね。「川柳の朗読」としてはどうだったのか、という部分については、これからじっくり考えたいと思っています。「川柳の朗読」がなにをすべきかについても。
田：ああ、でも今回の朗読で、なぜ「ＷＥ　ＡＲＥ！」が二人なのかがよくわかりましたよ。
荻：なぜ「ＷＥ　ＡＲＥ！」が二人なのかというより、なぜ「ＷＥ　ＡＲＥ！」が「この二人」なのかがよくわかりましたよね。
な：それは一番うれしい感想です。
倉：うん、そうですね。



◆おんらいん・レビュー◆

♪　♪　♪　♪　♪　♪　♪　♪　♪　♪　♪

ハラ・クラが「ピンキッシュ・ダイアリー（メタモルフォーゼ編）」と３号作品を朗読した「マラソンリーディング 2002」については、たくさんの方が全体的な感想をウエブ上で発表なさっています。
主なものをご紹介しますので、ぜひご一読の程。
そして、来年、まらりーの会場でお会いしましょうね♪

★田中槐さんの備忘録・７月８日付　／ http://www.diary.ne.jp/user/32727/
★菊池典子さんの日記・７月６日付　／ http://www2.diary.ne.jp/user/69577/
★渡辺百絵さんの日記・７月 14 日～／
http://www.geocities.co.jp/Bookend-Akiko/2527/diary8.html
★錦見映理子さんの日記・７月９日付／
http://www.ne.jp/asahi/cafelotus/eliko/nikki/umiyurinikki0207.htm
★村上きわみさんの日記・７月６日付／ http://www2.diary.ne.jp/user/64379/
★倉富洋子の日記・７月６日付／ http://www2.diary.ne.jp/user/118276/?

川柳の現在を考えるためにII

荻原裕幸（歌人）

前号で、川柳のジャンル論らしきものを少しまとめてみた。根拠を示さない断言に満ちた文章になったのは、いきなり作品を論じて、とりとめのない私見の羅列に映るのを避けるため、まず自分が川柳にどのような視線を向けているのかを見せたかったからだ。考えを進めてゆくうちには、補正すべき箇所も生じると思われるが、さしあたり、アイデンティティ（あるいは歴史性と言うべきか）の模索に重点を置いた、自分なりの現在の川柳観にそって、今回は、いくつかの句集について考えてみたい。句集を対象とするのは、任意の一句一句を抜き出して、自身の論に奉仕させるように作品を扱いたくないからである。句集を単位として考え、川柳作家の方法的な意識が見出せるならば、それに触れてみたいと思っている。

ただ、実は、川柳の句集について、どのような角度から考えてゆけばいいのか、ぼくにはまったく見識がない。解説や鑑賞的な感想をいくらか読んではいるものの、川柳の句集論と呼べるものに接したことがほとんどないからだ。そもそも「川柳作家による句集が他ジャンルに比べて著しく少ない（野沢省悟）」そうなので、句集論を目にする機会が少ないのも自然なのだろう。ともあれ、他ジャンルの作品集を読むように読んでいいものなのかどうか。おのずと手さぐりで進むことになりそうだ。

★

前号で、樋口由紀子の第二句集『容顔』（一九九九年、詩遊社）に少し言及した。そちらで述べたことはできるだけ繰り返さないようにしたいが、樋口の『容顔』における文体の特質として、散文的な外部のコンテクストに素直に連結しない、メタファーによって強い詩情を喚起することがない、という二点はとりわけ目だつ。この二点は何を生じさせているのか。

式服を山のかなたに干している　樋口由紀子

引用句は『容顔』の巻頭の作品。風景を描いているように読めないことはないが、山の彼方と言うほどの遠方に誰かが干すのが服であり、しかも「式服」であるといった詳細な記述は、それが単純な視覚的観察であることを疑わせる。疑いが生じると「式服」が何らかの別の概念を示唆しているのが感じられる。たとえ

ば「様式性」のメタファーではないのかと。けれど一句の文脈に戻すと、「かなたに干している」が、様式性の批判とか肯定とかいう決定的な別の意味に転化しない。どちらでもあるように読めるのだ。連想や想像を呼び起こしながらも散文的・具体的な着地点がないと言えるだろう。文体のしくみから考えれば、寓意のないアレゴリー、その形式だけを摘出したアレゴリーなのではないかと思われる。

月明し理科の授業を抜け出して　樋口由紀子
ラムネ瓶牛乳瓶と割っていく　同
石段に座れば見える白いバス　同

引用が恣意にならないように、冒頭から順に、さらに数句を引用してみる。一句目、どこか俳句のような体裁だが、学生が理科の授業を抜け出す時間帯に月が明るいという違和感は、この月は実景ではないのではないか、という想像を呼び起こす。メタファーかと感じさせながらもメタファーが解けない巻頭句と同じ構造だろう。二句目、句の背景にはさまざまシチュエーションがつながるが、この瓶を割る行為が、遊びなのか怒りによるものなのか何なのか、これと言った決め手を引き出せない。引き出せないために、具体的に瓶を割っているのか、瓶を割ることが何かを示唆しているのか区別がつかなくなり、一句全体が何か別の行為を示唆しているのではないかとも映る。三句目、石段をのぼれば、ではなく、石段に座れば、である。遠景が見えることに対しての条件としてはやはりどこかしら違和感がある。この句の喚起力は他に比べてやや弱いようにも思われるが、それでも、白いバスには、物理的な風景ではなく何か概念的なものを示唆している気配があり、これもまた巻頭句と同じ構造を抱えているのは明らかだろう。

もちろん各章ごとに作品の感触の違いはあるが、句集全体における文体の構造は、基本的に、この、寓意のないアレゴリー、その形式だけを摘出したアレゴリーに徹底しているようだ。前号の文章につなげて言えば、これが樋口の考える「川柳の骨格」なのだと思われるし、川柳のアイデンティティ、歴史性をここに見出しているのではないか。では、寓意のないアレゴリーとはいったい何だろうか。なぜそうした文体が徹底されることになったのだろうか。

樋口自身の発言を少したどってみよう。同人誌「MANO」第七号（二〇〇二年三月）に掲載された、倉本朝世を語った文章である。

いままでの川柳は日常生活に即し、経験に基づいて、具体的でわかりやすく書かれ、言葉に感情を移

すことで読み手に感動を与え、情緒によって理解されていた。人間くさい、人の心に響くのが川柳の特性であった。しかし、彼女は日常言語圏から脱出を試みている。ある言葉を聞いて、誰もが条件反射的に思い浮かべるもの、つまり言葉に慣用的に付着している情緒を取り除いて彼女の川柳は書かれている。

それゆえに伝達されにくく、概念で理解しようとすればわかりにくい。（中略）川柳は言葉の意味で屹立する文芸であるから、言葉の意味をいかに扱うかが焦点になる。」

倉本の作品の話は別にして、この樋口の認識には若干の無理があるように思う。「言葉に慣用的に付着している情緒」というものがあるとすれば、それを取り除くことは実質的に不可能である。意味の生成は、書き手の問題ではなく、読み手の側の問題に属するからだ。どのような文脈に置かれても、情緒は、一語の単位で一旦は機能してしまう。ただ、この情緒が強く機能することは回避できる。一語一語を、文脈のレベルで、日常言語とか詩的言語といった特定の言語圏に帰属させなければいいのだ。帰属させずに新たな領域に放つことで、語は強く機能できなくなり、本来の意味が緩んだり新たな意味が覚醒したりするだろう。それを可能にする方法を模索するなかで、寓意のないアレゴリー、その形式だけを摘出したアレゴリーが、樋口の文体で徹底されたと考えるのが、句集『容顔』を読む上での自然な結論のように思われる。

この文体の是非を考えるには、倉本朝世との類似や相違、また他作家との比較も必要だろうが、樋口のこの一冊の句集によって、川柳のジャンルとしての特質である（と樋口が考えている）「言葉の意味で屹立する」ことの新たな可能性が提示されているのは間違いない。機会があれば、川柳史に照らして、この点からさらに考えてみたいと思う。（この文の素型になる考えは、一九九九年八月の『容顔』出版記念のシンポジウムでも語った。付記しておく。）

★

次に、大西泰世の第三句集『こいびとになってくださいますか』（立風書房、一九九五年）について少し考えてみたい。実は、この句集をおもしろく読み進めながら、大西の想定している川柳の輪郭がうまく見えないことに、不思議な違和感をおぼえていた。

月光につまずくもののある安堵　**大西泰世**

わが死後の植物図鑑きっと雨　**同**

つぎの世もそのつぎの世も魚でいる
こいびとになってくださいますか吽（うん）　**同**

強く惹かれたという点から考えると、こうして作品がいくつも抜き出せるし、これらの句には、詩的なイメージを広げつつ人のこころにひびくという楽しさがある。加えて、五七五の短詩というだけではない川柳性というものもここには見てとれる。川柳史にかかわることばでは、「穿ち」と言えばいいだろうか。もちろんこの穿ちには留意を要する。古典川柳における意味での穿ちは、大西の句のように、私やら自我やら自意識やらが入りこんでしまった文体では成り立たないと思われるのだ。ただ、それでも大西の句が穿ちを感じさせるのは、一人称的な意識の上位にもう一つの意識を積み重ねているところにある。

たとえば、一句目、月光につまずくもののある、というカメラアイ的把握・発見に対して、話者の内面に強くひびかせるような詠嘆の文体をとらず、安堵という上位の自意識の登場によって、話者から他者へと何かを手渡そうとしている。あえて史的な捉え方をするなら、前句附の前句＝題の方へと逆にことばがすりよって行く感じがある。発想が飛躍する方向は逆なのだが、見えない題へのつながり＝「安堵」を提示することによって、把握・発見の飛躍感をきわだたせていると言えないだろうか。二句目もよく似た文体の構造を見せている。「きっと雨」というどこか俗っぽいセンスのことばは、自意識をきらめかせるといった意味での詩の表現からはどこまでもかけ離れてゆくが、そのことが逆に「わが死後の植物図鑑」に飛躍感を与えているようだ。ある種の無粋な自意識がエキセントリックな自意識に連結していて、この関係が穿ちを感じさせているのではないか。以降、特に句意に説明は要さないと思うが、三句目は、言外に見えない題を求めさせる文体、四句目も、阿吽の吽が、承諾の「うん」と掛けられていて、この奇妙な対話もやはり、言外に見えない題を求めさせていると言えようか。穿ち云々に史的見解の相違はあるかも知れないが、いずれにせよ現代川柳の良質な成果と言っていいだろう。

ただし、前述したように、句集『こいびとになってくださいますか』を読むと、こうした川柳性が明確に見える作品だけが主調をなしているわけではない。むしろ大西の想定している川柳の輪郭からすれば、引用句は傾向の一つにすぎないのかも知れない。

蒼天や一夫あることのみ悲し　**大西泰世**
ひとづまにきざはしはある蒼我（しゃが）の花　**同**
静脈へそそがれてゆく桜かな　**同**
慟哭という曼珠沙華見ておりぬ　**同**

引用句の文体にはある種の類型性を感じるが、この文体は、句集の主調の一つであると言っていいほどに目だつ。正直なところ、これらの句が川柳だと言われると戸惑いを感じざるを得ない。それは、あまりにも俳句に似すぎているからだ。川柳と俳句に境界線を引くつもりはさらさらないし、俳句と間違われてしまう川柳があっても別に何の問題もないと思う。だが、俳句的な類型性を抱えた川柳というのは、なぜそれが生じるのか、どうもよくわからないのだ。

もちろん仔細に作品を見れば、作者の名前を伏せてあっても、これが俳人の句ではなさそうだと想像はつく。一句目の「のみ」、二句目の「はある」、三句目の「てゆく」、四句目の「という」等は、（俳句観によって差はあるものの）一般に、俳句の様式性に拒まれがちな語法であるからだ。けれどもそこに、川柳作家としての方法意識を感じとれるかと言うと、これはむずかしいと思う。大西の作品世界については、これ以前の句集を抄出でしか読んだことがないし、まだ充分に把握しきれていない部分があるが、暫定的に、この点のみ疑問を提示しておきたい。

★

もう一冊、矢島玖美子の第一句集『矢島家』（乃村工藝社ＭＥＤＩＡ－２ｕ、二〇〇一年）について少しふれておきたい。脇道から語らせてもらうと、二〇〇二年五月、矢島を含めた川柳作家たちと『矢島家』をはじめとした数冊の句集を読むための会に出席させてもらった。実力のある川柳作家たちが、現代川柳の一句一句をどういった具合に読むのかをリサーチさせてもらいたかったのだ。読む感覚の違いに驚きを感じるケースが何回もあったが、そのなかに『矢島家』の次の一句についての読みの齟齬があった。

待ち合わせしたことのある喫茶店　　矢島玖美子

ぼくとしては、これほどまでに詩的なことが何も語られていない句を句集に収めるには、よほど確固たる川柳観がないとできない、という意味で気になっていたのだが、句集の前後の設定＝あなたとわたしの恋愛の物語から考えれば、むしろ過度なまでに情緒に訴える句であるという意見があった。言われてみれば、なるほどと思う面もあるが、しかし、その程度の訴求のためだけに、わざわざこの句を句集に収めるものだろうか。再考しながら、次の句に行きあたった。

大切なことは書かない身上書　　矢島玖美子

朧夜をどこの誰でもなく歩く　同
どこまで歩いても空の下にいる　同
ぼんやりと光る廊下のつきあたり　同
さっきより少し明るくなった空　同

作家の自意識にはそれぞれ「正位置」があって、短詩型の表現では、一般に、正位置から大きく踏み出したり、逆に消してしまったりするものだ。ところが矢島の場合は、ときに正位置にある自意識をそのままさらけ出している（ように見える）作品がある。句集の巻頭句でもある一句目、身上書は、川柳そのものをも示唆していよう。二句目から五句目、いずれを見てもわかるように、ある種の正位置から決して大きくはみ出さない範囲にことばを投げて、作品へと回収している。大切なことは書かないわけである。こうした作品から見えるのは、表面的には、方法論の欠落ということになろうが、しかし、矢島の方法的意識は、むしろこの方法論の欠落のなかにふんわりと内包されている感触があるのだ。

先に引用した「喫茶店」の句も、たぶんそうした正位置の自意識を露出させる類の、内包された方法的意識によるものではないだろうか。では、なぜ、そのような文体を矢島は選んでいるのだろう。考えられることはいくつかあるが、単純に逆算してみれば、自意識の正位置を見せることそのものが、矢島のこれらの句の方法であり目的であり着地点でもあるということになる。見せているのは自意識ではなく、正位置の「位置」なのだろう。作家がどのような存在であるかが示されるには、自意識のパフォーマンスの高さが必要だが、作家が「どこにいるのか」が示されるには、必ずしもパフォーマンスの高さは必要とされない。

死ねそうな今朝の洗面器の深さ　矢島玖美子
この世からはみ出しそうで歯を磨く　同
ことんと秋ことんと悪事露見する　同
みぞおちのあたりで秋を受けとめる　同

ことさら書き綴るほどのことが何もないかも知れないと思われるほどの「ふつうの日常」にいることを明らかにし、しかも大切なことは書かない。だから、引用句のように、ふつうのこと（にしか見えなくなっている行為や事象）がかすかに温度を帯びて読者の前に提示される。このふつうの日常が帯びるかすかな温度に、矢島の考える川柳が見えている。

『矢島家』が帯びているかすかな温度とは、詩とも川柳とも認識できなくなりそうな、ぎりぎりの境界にたちあがる、きわめて現在的な、日常のリアリティなのだろう。リアリティとは、詩の別名でもある。

RUN!
RUN!

ハラ・クラ

WEST SIDE
なかはられいこ

今号の発行が遅れたために、ご心配してくださった方々、たいへん申し訳ありませんでした。えと、クラトミもなかはらも、真夏の積乱雲くらい、あるいは、真冬のチョモランマくらい元気です。（どんなんじゃ？）元気すぎて欲張りすぎた結果です（笑）。

自分たちがこころから楽しいと思うことを、読者のみなさんも「楽しい」と思ってくだされればしあわせです。これからも「WE ARE!」は、元気と楽しさを提供しつづけていきたいと思います。

EAST SIDE
倉富洋子

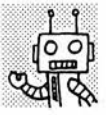
前号にも難産の苦しみを書いたばかりだというのに、今回はさらにさらに発行が遅くなってしまいました。ゲストのみなさま、そして5号を楽しみにして下さっていたみなさま、ほんとうにごめんなさい。

今回は、大増ページだった前号からさらに10ページ増量という、とんでもないことになりました。でも、どれも次号送りにしたくないお原稿ばかり。「宵越しの銭は持たない」江戸っ子気質な「WE ARE!」を、これからもどうぞハラハラと見守っていてくださいね。

✠プロジェクトA✠

なかはられいこ
1955年生。愛知県在住。
「川柳展望」会員
「ラエティティア」所属
句集に『散華詩集』
『脱衣場のアリス』

倉富洋子
1962年生。東京都在住。
「川柳大学」会員
「ラエティティア」所属
句集に『薔薇』



前回大好評だった、Eの会の全コメントのウエブ公開。
もっちろん、今回もやります！
また、今回は「朗読という文化・朗読というメディア」の座談会のノーカットヴァージョンも、ウエブにて大公開！　詩人の田中鷹介さんをはじめ、俳人・歌人と川柳書きのあつ〜い全発言、じ〜っくりご賞味あれ。

WE ARE! 第5号
2002年10月31日発行
編集・発行／プロジェクトA
年3回刊
一部　500円（送料別）
年間購読　1800円（送料込み）
郵便振替口座
００８５０－３－９１８３８
口座名義　プロジェクトA

印刷・製本／東海タイプ商会
名古屋市昭和区鶴舞3-2-16

■編集室／倉富洋子方
198-0036　東京都青梅市河辺町
6-16-10-203
Phone & Fax　0428-22-5088

■会計室／なかはられいこ方
458-0912　名古屋市緑区有松町生山
49-2有松サンハイツ502
Phone & Fax　052-622-5621

WE ARE! SITE

http://www.sweetswan.com/weare/

STAFF

なかはられいこ
・短詩型のページμ　http://www2u.biglobe.ne.jp/~myu2/

倉富洋子
・Stage. B　http://homepage3.nifty.com/kura0724/

GUEST

▼俳句▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

遠藤　治
・四童HP　http://www.asani-net.or.jp/~xi4o-endu/

ていだきねこ
・木造　http://www.geocities.co.jp/Playtown-Yoyo/7483/index.html

▼短歌▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

加藤治郎
・鳴尾日記　http://www.sweetswan.com/jiro/

本田瑞穂
・日々のうた　http://www5b.biglobe.ne.jp/~anemone/

▼川柳▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

丸山　進

傘　裕見子

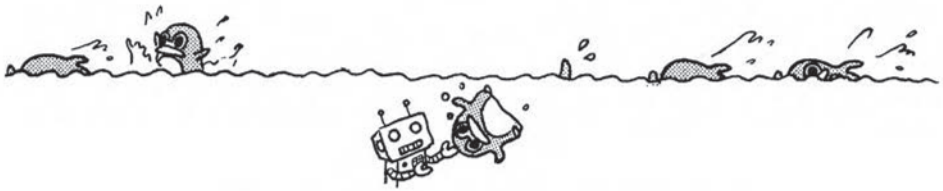
▼原稿執筆▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

荻原裕幸

藤原龍一郎

▼表紙キャラクターデザイン／ウチガキナホコ
http://home.att.ne.jp/sky/nah/

▼イラスト／佐藤りえ
・LA DOLCE VITA　http://www.fsinet.or.jp/~la-vita/



みなさまのご協力に心からの愛と感謝をこめて·プロジェクトA

WE ARE!

VOL. 5